

特500  
757



2

0054059-000

特500-757

日本飲楽郷案内

酒井潔・著

竹酔書房

昭和6. 4

AIB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



持500  
757

日本  
欽樂  
御宴  
内

—

SAKAI

236

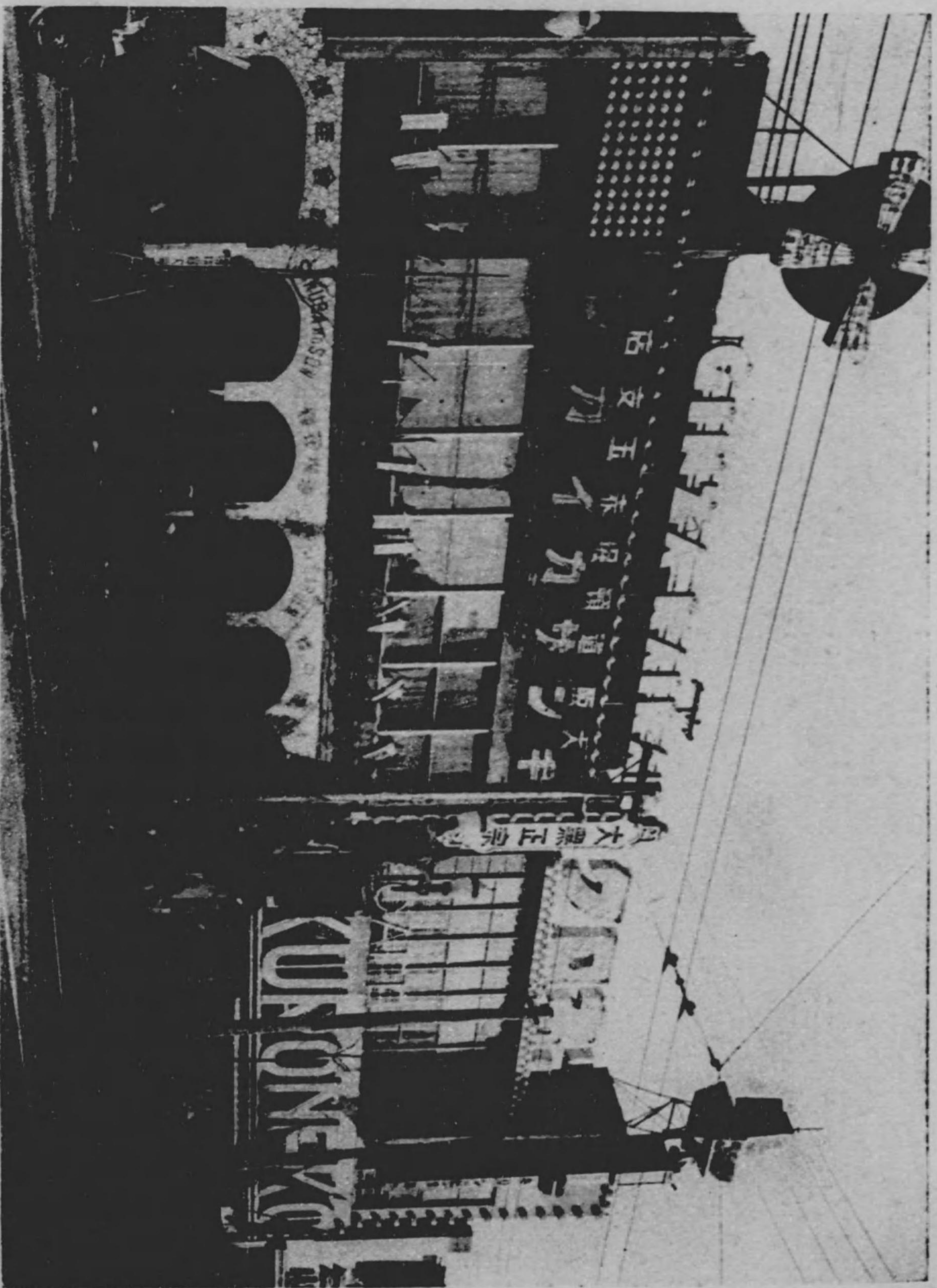
四月五日 押印



函	風俗
號	391
永久保存	

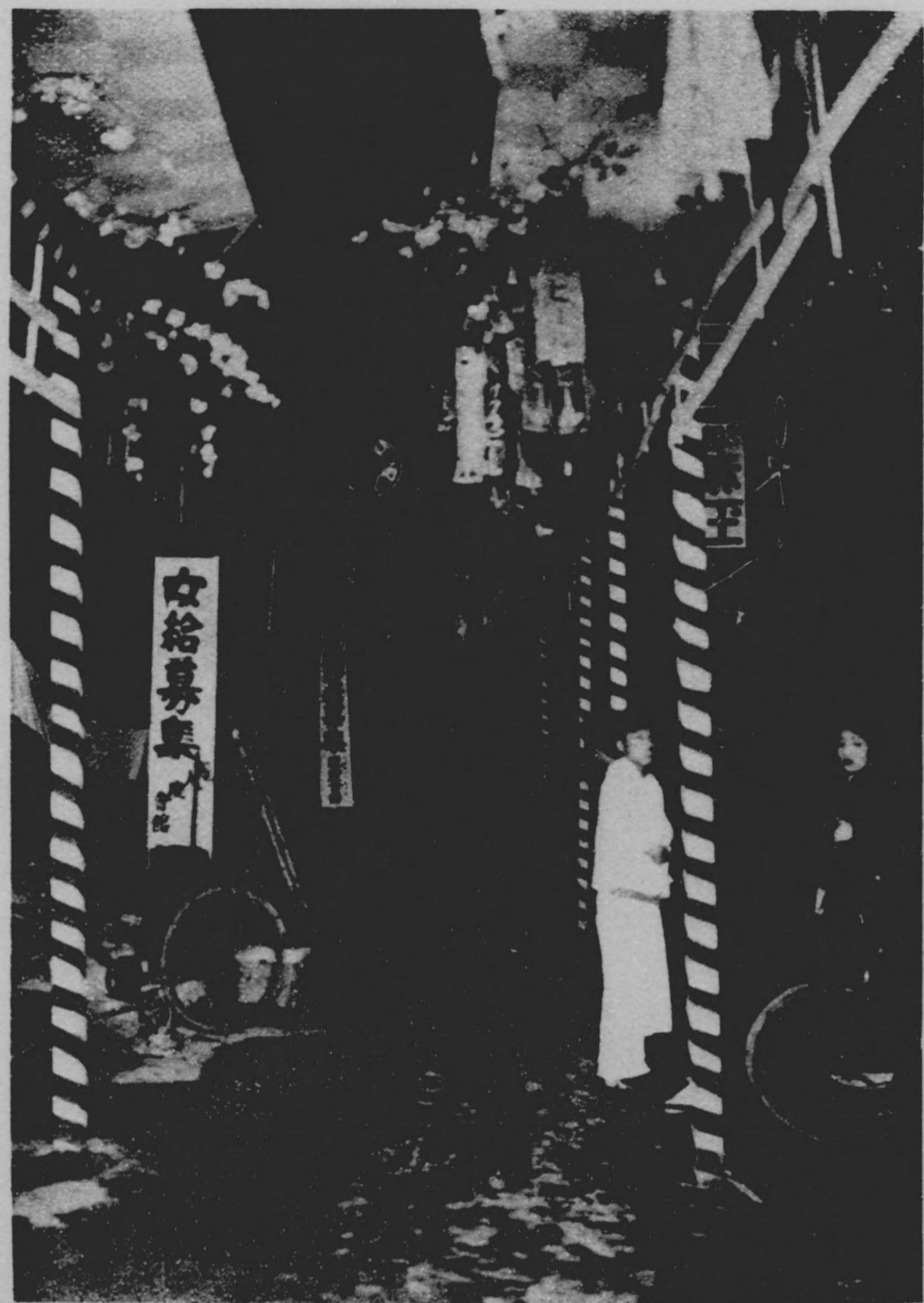
二二二

148



銀座の銀座會館と黒猫の共同戦線





新宿カフェー街の観櫻會夜景



新宿遊廓Fuji樓の正面の夜景

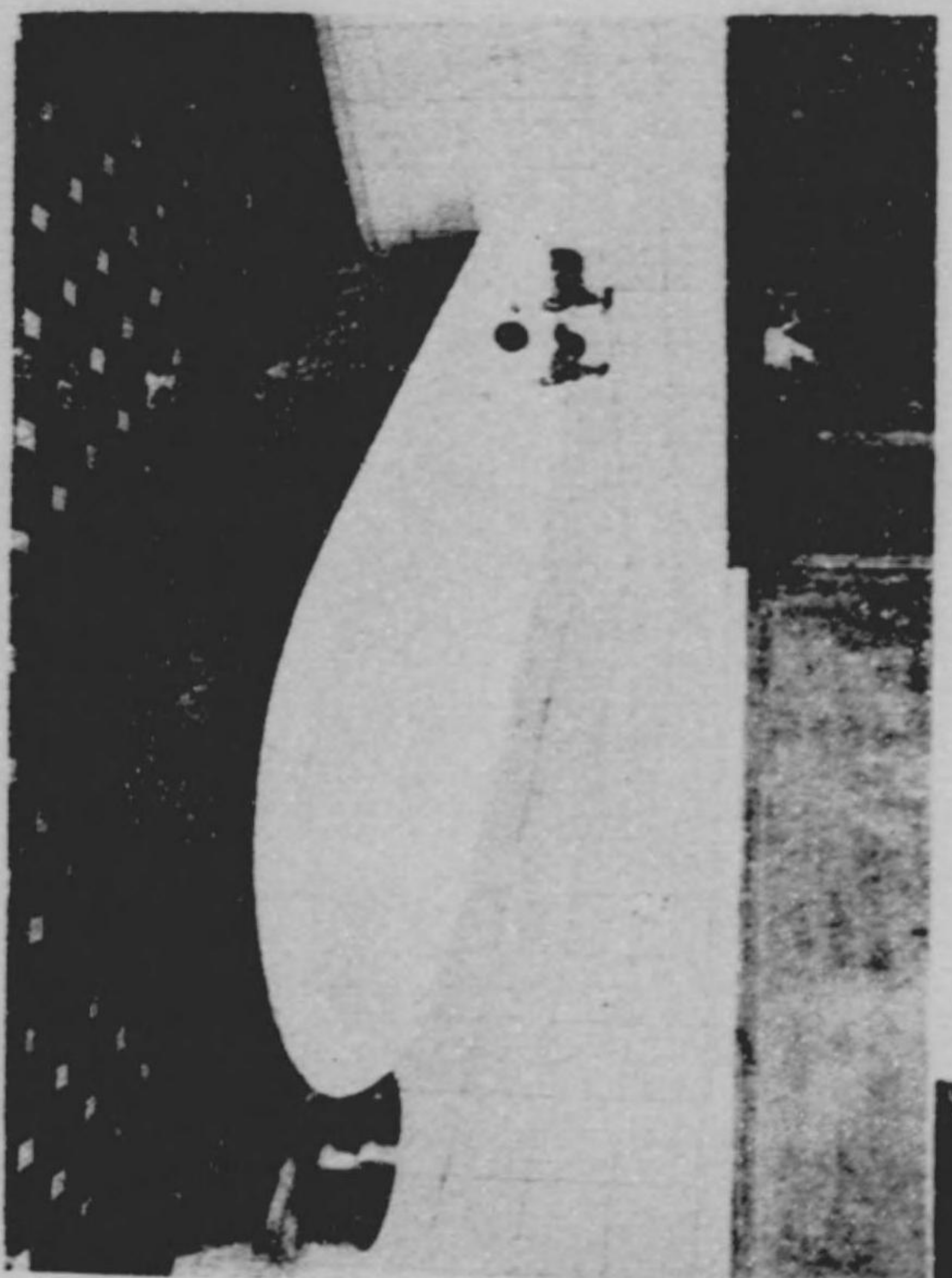


東京龜戸窟街

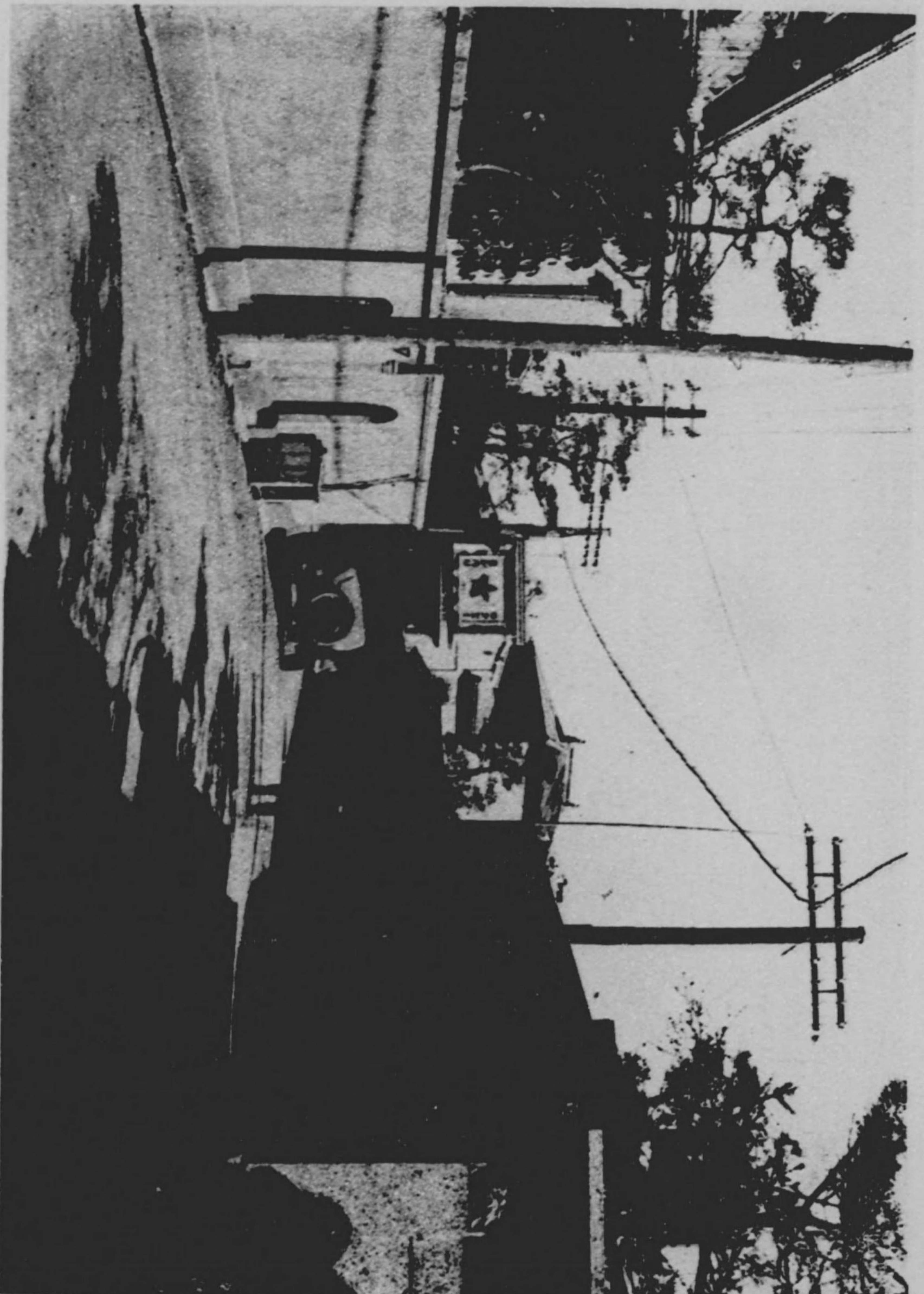




大阪飛田旭樓の洋式ルーム

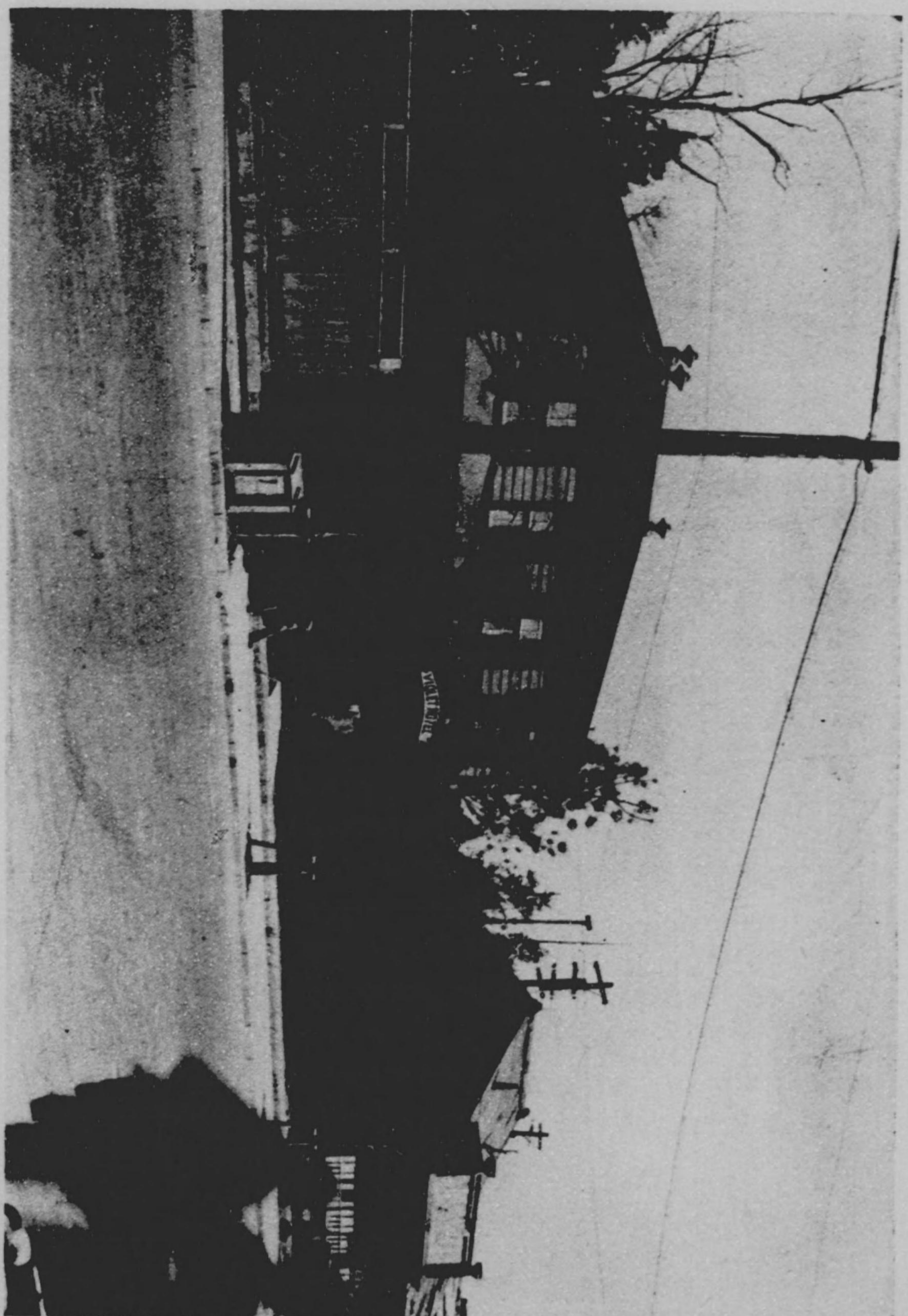


同樓の洋式浴室



横濱小湊サザナホテル街（左、大和ホテル。右、スターホテル）





横濱本牧大通に面したグアイオホテルの全景



探奇マン諸君!!

去年「巴里上海歡樂郷案内」を書いたら、これが當つてデヤンノ一巻れた。だもんだから、出版元の方から、其の續編としてサア書け〜と無理矢理に書かされたのが、今度の「日本歡樂郷案内」でから。

これが一巻當つたら、竹醉君の言によれば、上海見學團を組織して、僕を其の團長に推薦してくれさうだ、勿論氣の置けない官費旅行だから、僕たるもの食指大に動かさるを嫌な處で、願くは今一度ドンと當れ!

何故君は、性慾もなくて、そんな物を書くのだ? なんて道德面は廢してくれ! いや、それでもと強ひてお聞ひ合せなさるのなら、前著「巴里上海」の前書を見てくれ給へ。まだ分らぬ? 勝手なしゃがれ

で、そんな朴念仁はうつちやらかして置いて、簡単に本書の内容を紹介する事にする。先づ東

探奇マン諸君!!



京の歡樂郷を振り出しにして、横濱、大阪、神戸と行脚見聞した報告書なのである。さて、其の行脚して廻つた歡樂郷だが、普通一般の藝者とか、娼妓とか云ふ所は、出来る丈簡略にした。一九三一年度のモボ達に見れば、吉原へ江戸軟派の研究に行くよりは、一回五圓也の女付き自動車を買つて、彼女いとも近代的なサービスを受けながら隅田公園でも一周して来る方がよさうだから、其處は察しよく、出来る丈平凡な所は素通りして、裏の裏許りを漁つて見た。

然し、歡樂郷案内とか、花柳界案内とか云ふ事は、今までに、新聞雑誌、單行本等で、どの位書き散らされたか分らない。それに又そうく奇抜な珍奇な遊びと云ふものが有る筈もない。どうあがいたつて、日本の内地ではと、あつさり諦めて仕舞へば、それまでだが……さう又手つとり早く諦める事もあるまい。何んだつて底には底があるもので、存外見様聞様によつては、意想外の樂園を發見して、これはくくと三嘆する事もあるものだ。

果して本書が、諸君に幾許の未知の樂園を呈供するか？ それは僕には分らぬ問題だ。中には

本書に書いてある事なんかは、微塵も稀らしくないと云 凄いのも居るだらう(そうした人々は僕の方から月謝を持つて教を乞ひに行く)然し又、本書を読んで、「あゝ世は春じやなあ」と云ふ事を、しみじみと痛感する人々も多々あらう。但し、嚙んで含める様な、スロー・モーションの書き方はしなかつた。僕の本を見な様な讀者なら、皆相當の通人だらう。一を聞いたら、十でも百でも、知り度い丈知つて、行きたい所へ、勝手に行き給へ!

昭和六年四月

著

者

# 日本歡樂鄉案内目次

## 第一編 東京歡樂鄉案内

### 第一章 銀座風景

- ▲プロロロオガ
- ▲エロの流れと女給
- ▲銀座のモダン・ガール
- ▲不良マダムとハンドバック・ボーイ
- ▲スピキング・ガール
- ▲劇場街としての銀座

- ▲銀座のカフェ・酒場
- ▲しのよい女の境
- ▲ストリート・ガールの拔尾
- ▲ステッキ・ガール
- ▲不可思議な魔の家
- ▲将来のエロ街としての銀座

### 第二章 夜の淺草

- ▲車夫の導く怪しき家
- ▲貞操と十銭銀貨
- ▲樂屋裏覗き
- ▲吉原夜話

目次

目次

第一章 銀座風景

▲プロロロオガ

▲エロの流れと女給

▲銀座のモダン・ガール

▲不良マダムとハンドバック・ボーイ

▲スピキング・ガール

▲劇場街としての銀座

▲銀座のカフェ・酒場

▲しのよい女の境

▲ストリート・ガールの拔尾

▲ステッキ・ガール

▲不可思議な魔の家

▲将来のエロ街としての銀座

第二章 夜の淺草

▲車夫の導く怪しき家

▲貞操と十銭銀貨

▲樂屋裏覗き

▲吉原夜話

第三章 エロの山手.....七七

- ▲伸び行く新宿
- ▲エロの真実
- ▲素脚を客に投げつけて
- ▲カフエー職術
- ▲寂れ行く神樂坂
- ▲名物神樂おでん
- ▲戀をボートに乗せて

- ▲戀の殿堂武蔵野館
- ▲彼等のためのホテル
- ▲幸仕と罰金
- ▲女給の射落し法
- ▲神樂坂の藝妓
- ▲牛込の小町娘

第四章 結婚媒介.....一〇九

- ▲媒介所の良
- ▲媒介所と密通
- ▲媒介所の洋行的活動

- ▲結婚媒介
- ▲未亡人の御相談相手

第五章 二つの年中行事.....一二一

- ▲雨國の川開き
- ▲雑踏の中に咲く戀
- ▲街の瀧風
- ▲男の腕に跨がった女

- ▲河中の酔客
- ▲お會式綺談
- ▲貴十万の出入
- ▲合理的な暴行

第六章 ダンサーの流すエロ.....一三三

- ▲肉の香り
- ▲ダンサーから伯爵夫人に
- ▲アレセントとサーピス
- ▲不良ダンサーと罰金

- ▲ダンサーの逸出
- ▲ダンサーの收入
- ▲舞踏場荒しの不良モガ

第七章 ランデヴウ.....一四五

- ▲公園のロマンス
- ▲尖端的な、餘りに尖端的な
- ▲上野の森の接吻
- ▲郊外のホテル

- ▲公園の芝生に夜を明かす人
- ▲墓地の夏の夜景
- ▲芝公園の失敗

第八章 花街秘話.....一五七

- ▲藝妓とモダニズム
- ▲女將の恍惚
- ▲二三流花街
- ▲金、金、金

- ▲新橋藝妓と政治家
- ▲柳橋の夜景
- ▲藝妓の内面生活
- ▲牛玉と水揚

第九章 魔窟街.....一八一

- ▲鹿寓街のカフェー
- ▲鼠鳴きの誘惑
- ▲木賃ホテル街
- ▲露店淫賣
- ▲郊外の私娼拔尾

- ▲硝子窓と女の眼
- ▲私娼の立志傳
- ▲ホテルの別間
- ▲土管中の闘争

### 第二編 大阪歡樂郷案内

第一章 道頓堀……………二〇三

第二章 道頓堀の劇場……………二〇七

第三章 芝居茶屋と裏表……………二〇九

第四章 道頓堀のエロ女給……………二一九

第五章 エロ町の灯……………二二七

第六章 上方名物やとな……………二四九

第七章 寶塚行遊記……………二五一

第八章 大阪私娼記……………二六五

### 第三編 横濱歡樂郷案内

ハマの遊び場……………二八一

本牧ガール……………二八五

本牧に降る金……………二九三

横濱山之手風景……………二九七

海邊のエロ風景……………三〇五

### 第四編 神戸歡樂郷案内

波止場附近のガイド……………三一五

港街の仙境……………三二一

神戸のバラケツ……………三三一



第壹編 東京歡樂郷案内



目次

日曜日の戀と登山.....	三三四
神戸の明暗近代色.....	三三八
上筒井の巻.....	三三八
朝鮮ガール.....	三四一
三の宮の巻.....	三四二
南京街のエロ風景.....	三四七
新開地の巻.....	三四九
ブルジョア愚聯隊.....	三五三
キングの巻.....	三五六
寶塚會館の巻.....	三五七
枕瀬の巻.....	三五七

(目次終)



ブローカー

銀座のカフェーと酒場

エロの流れと女給

しのさい女の境腕

銀座のモダン・ガール

ストリート・ガールの披露

不良マダムとハンドバツタ・ボーイ

ステツキ・ガール

スピーキング・ガール

不可思議な魔の家

劇場街としての銀座

将来のエロ街としての銀座

## ブローカー

モダン東京は益々と成長した。それは破瓜期の處女がのびのびと美しく育まれるやうに、今はもう震災でベシヤンコになつた惨めな影はどこにもない。

夜の街には戀の波が渦巻き、歡樂の焰が赫々と燃える。凡ゆる華酒な裝飾を施したモダン東京は、今やその體內から發散する異常な情熱で、若きブリマドンナの様に輝かしく匂ふ。或者はこれをジャズ文化と云つて貶しつけ、或者は東京に江戸の情調が消滅したと云つて慨歎する。

然し、僕達は今そんなことに構つちやゐられない。ジャンジャン金を使つて隅から隅までの歡樂郷を彷徨せねばならぬ。

東京と云へば日本の帝都、東洋一の大都會だ。大阪が一番で人口二百四十六萬だつて云ふけれど、モダン東京だつて隅つこの八十二ヶ町村を合併すれば、人口悠に四百五十萬を突破する。四百五十萬と云へば世界でも四番目とは下るまい。

さて、何處が東京でいちばん面白いのかと訊かれても、さうした質問にはちよつと明答が出来かねる。好きな女がこちらの意のままになる所がいちばん愉快なところだが、そんなことをクドクド書いてゐたら誰にぶん擲られるかも知れないから、僕の彼女は誰も見えないところへ隠してをいて、さて諸君！

一口に歌舞舞と云つても、人には各々好き嫌ひがある。

「俺はダンスなんて嫌ひだよ。脚が短くて掌に脂肪がでるからどうもやりにくくて……」  
といふ人もあらうし。

「女郎買はまつびら御免だね。白粉の剥けた圓子面をして、朝歸りの客の肩をボンと叩く場面は思ひ出してもゾツとするよ。」

さうかと思ふと、自分の注文した料理までムシヤク／＼バクつかれて、酒を呑まれて膨れ面をされておまけにチップまで取られて、一度でバーやカフェーにコリコリして了ふ方だつてないとは限らぬ。又一方では

「淫賣場にはもう絶対に手を付けぬ。二つのヨコネと淋ちやんの土産で、暮のボーナスも治療代で吹飛ばしたからネ。女は矢張り處女を對手にするに限るよ。甘い戀と、甘い家庭、少々ツイフに替められたつて、替められてゐるぶんには怪我はないぜ！」  
と、カーンと頭の鉢を一つ喰はしてやりたいやうな意久地なしたつて、一人もないと誰が斷言出来るやう。

けれども、そこまで考へたら歌舞舞案内なんて逆も書けぬ。誰が振られやうと、誰が病氣にならうと、筆者の胸はこれ只光風舞月である。

### ネオンサインに輝く夜の銀座

銀座は東京の心臓である。

銀座は東京の顔である。

銀座は東京の喫煙室である。

銀座に對するいろいろな人の批評はかくの如く多種多様だ。

「ねえK様、銀座は刻々に變つて行くわね。」

此間も僕と一緒に歩いたウルトラ・モガがかう云つた。

銀座を歩くには、女を杖の變りに引摺つて歩くことが、ウルトラ・モダン派の流行である。すると女は、ふと立ち止まつて艶々しい太腿の片鱗をのぞかせ乍ら、ゆるんでもゐないストッキングを引締めるやうな恰好をするであらう。

銀座を歩く女は、如何にして自分の姿を他人に注目せしめるかといふことを常に頭の中に描いてゐる。

スカートの短かいのは流行遅れである。

壁塗式化粧法も流行遅れなら、コテをあてない斷髪も野暮である。爪は長くし、唇は小さくては駄目——さてその次は？、ズロースをはかないこともその一つであるが、これは表面的に効果がないのでまぢまちである。

單に若い女の生々した姿を見て歩くだけでも、銀座を散歩することは徒勞ではない。

天空高く輝く幾十幾百のネオンサインは、繁華なる商店街に不夜城の如き觀を與へ、赤い灯、青い灯が空と地に縫れ合つて、電飾のすさまじい渦巻は、さながら一つの巨火が流れてゐるやうな感じである。

三兩か四兩の煙草を買ふのに數拾圓を投ずるマダムもゐれば、數百圓もするシヨールをまるでハンカチでも買ふやうにあつさりと求めて歸る令嬢もゐる。

然し、それよりも更に僕達に驚異の眼を輝かしめるものは、あの夥しいカフェーとバーの進出であらう。

松屋、松坂屋、三越などいふ大デパートの出現で、古くからの老舗がバタ／＼と倒れてからは、右も左もレストランやバーに早變りした。

殊に早くから銀座を狙つて虎視タン／＼と進出の準備をしてゐた大阪の商人は、遂に昭和四年から五年へかけて東西カフェー戦の火蓋を切り、こゝに猛烈なるエロ合戦が勃發した。

試みに銀座一丁目から八丁目までの主なるカフェーとバーとを調べてみよう。  
先づ一丁目にはカフェー美人座がある。

開店當時は大阪美人座の分店だ、いや分店ではないと東西美人座が都新聞で廣告のなすり合ひをやつたが、それでも純大阪美人を三十人も飛行機で運んで来た時は、流石の江戸つ見も面喰つた。

既にその前から人形町にユニオン、銀座にサロン・ハルといふ大阪方の敵を引受けてゐた東京側では、タイガーや、ゴンドラなど憤然としてこれに對抗の氣勢を示してゐた。

けれども如何せん、いかもの喰ひは何處の人も好きと見えて、あの甘つたるい大阪辯のサービスは江戸つ見の人氣をいやが上にも喰り立てた。おまけに、エロの方なら役者が一枚上だといふので、大阪美人の名は銀座街頭の輝かしい花となつた。

「おい君、一緒にどこかへドライブでもしようか。」

とやると、

「え、ドライブでもランチ・ブウでも何でも結構です。どこがよろしうおまつしやろ？箱根だつ

か、それとも熱海？妾えどこへでも行きまっさ。え、砂風呂？そんなけつたいなとこ、妾えいきまへん。」とくる。

どうせ何處に行つたて洗濯される貞操に變りはないのであるが、砂風呂をいやがるところがしほらしい。

六十人の女給のうち三十人は東京、三十人は大阪と、東西の美人が對峙して、腕によりをかけての奮戦である。

すると間もなく京橋々畔河合ビルには、道頓堀日輪が家賃千八百圓、敷金貳萬圓、設備費貳萬圓をかけて又々エロの尖端を切らうと開店した。

金儲けのためなら手段を選ばぬ關西つ見は、女給の面々に瀧口雄子、大塚つよ子、井上準子、永井柳子などいふサービス・ネームを名乗らせて、ダンゼン女給内閣を組織し、「日輪内閣の危機」など、號外までカッ飛ばした。

その號外なるものが、これ又人を喰つたもので、

「濱口雄子と安達謙子とが、顧客に對するサービスの方法に就て意見の相違を來し、遂に討論の結果全く意見の衝突を見たので幣原嬢が仲裁した」

なんて、宣傳もこゝまで來るとちよつと嫌氣がさす。

同じ二丁目のクロネコが、これ又大阪の赤玉に買収された。

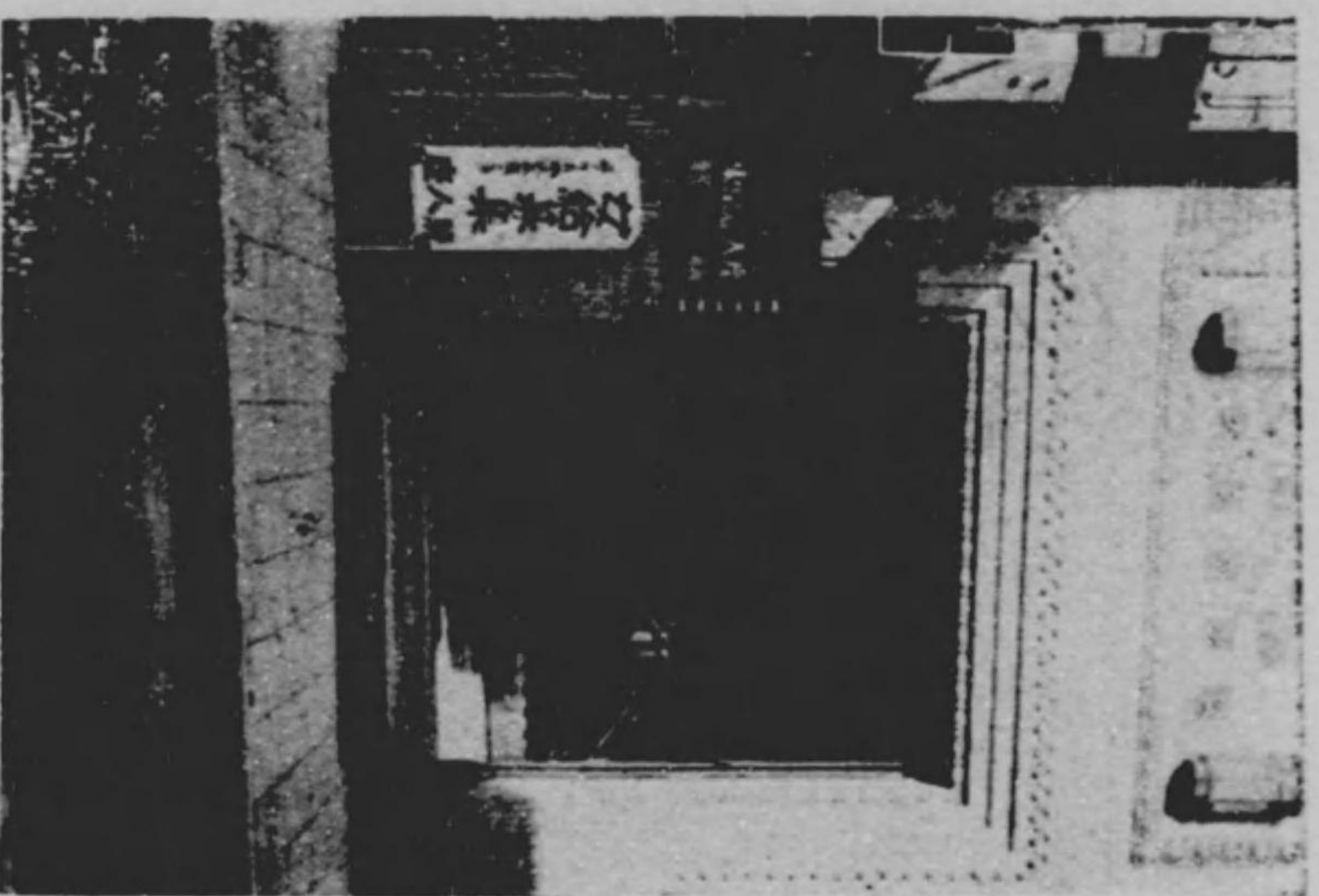
銀座筆頭のエロエロ・バーとして、その建築中から仕掛けが怪しいといふので改築をしたほどの店であつたが、二年と壽命のなかつたことは返す込すも残念である。

アップルジャック一杯のんでボンと五圓紙幣を放り出して歸る客や、學生服では入れないので、親の脛がちり共が猫も杓子も洋服をつくつたといふモダン・エピソードも、今は昔の夢物語りになつた。

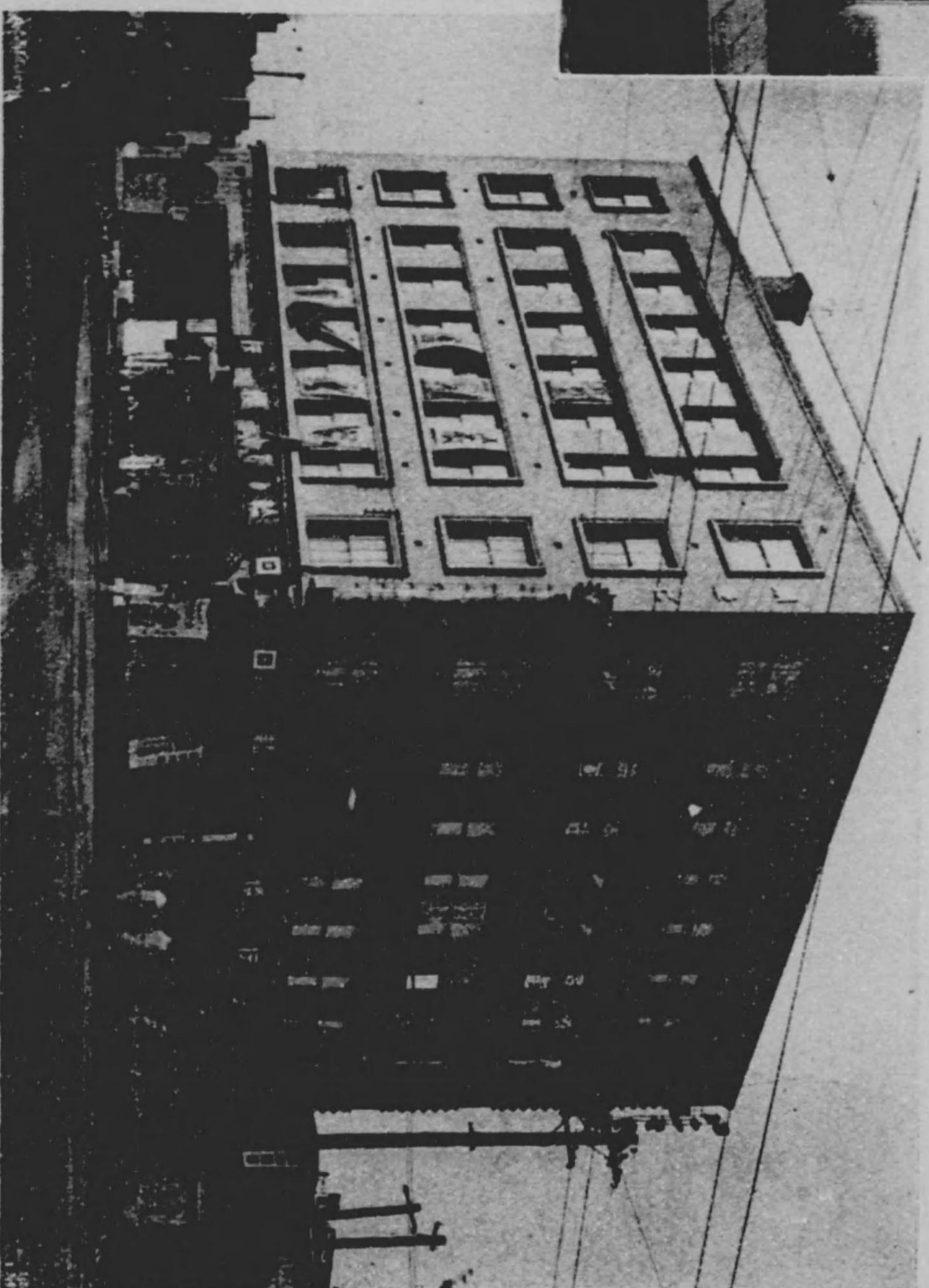
尼さんの女給も見られないし、天井からぶら下つた天蓋や幟旗なども今考へると懐しい。

赤玉ではこのフネのフネに卅五萬圓を投じ、一部の改造と一切の設備に更に十萬をかけて、許可もないのにキャバレー銀座會館と命名した。

女給も二百人を擁し、そのうち五十人は大阪から連れてくるといふ豪勢さで、悲しや東京の銀座は

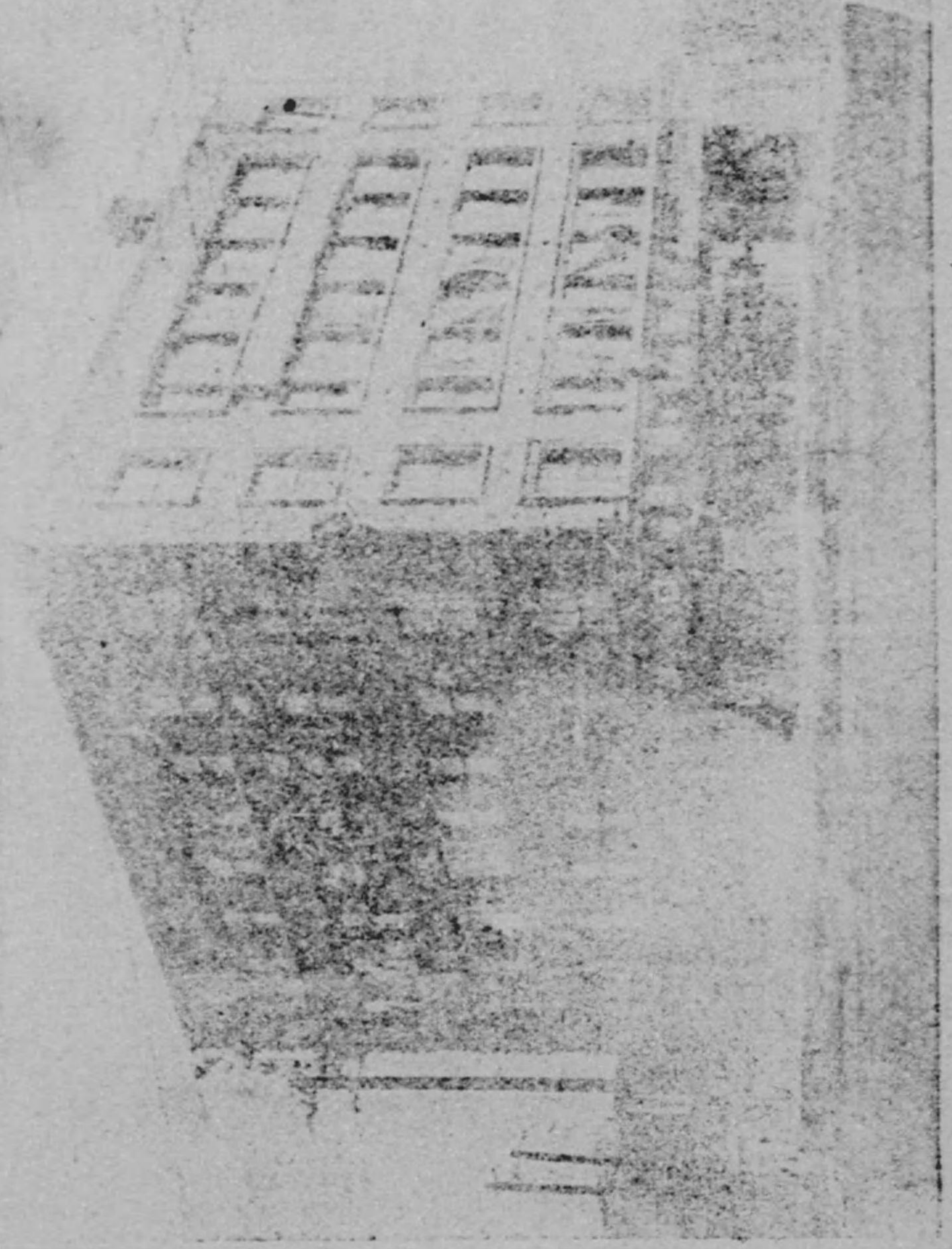
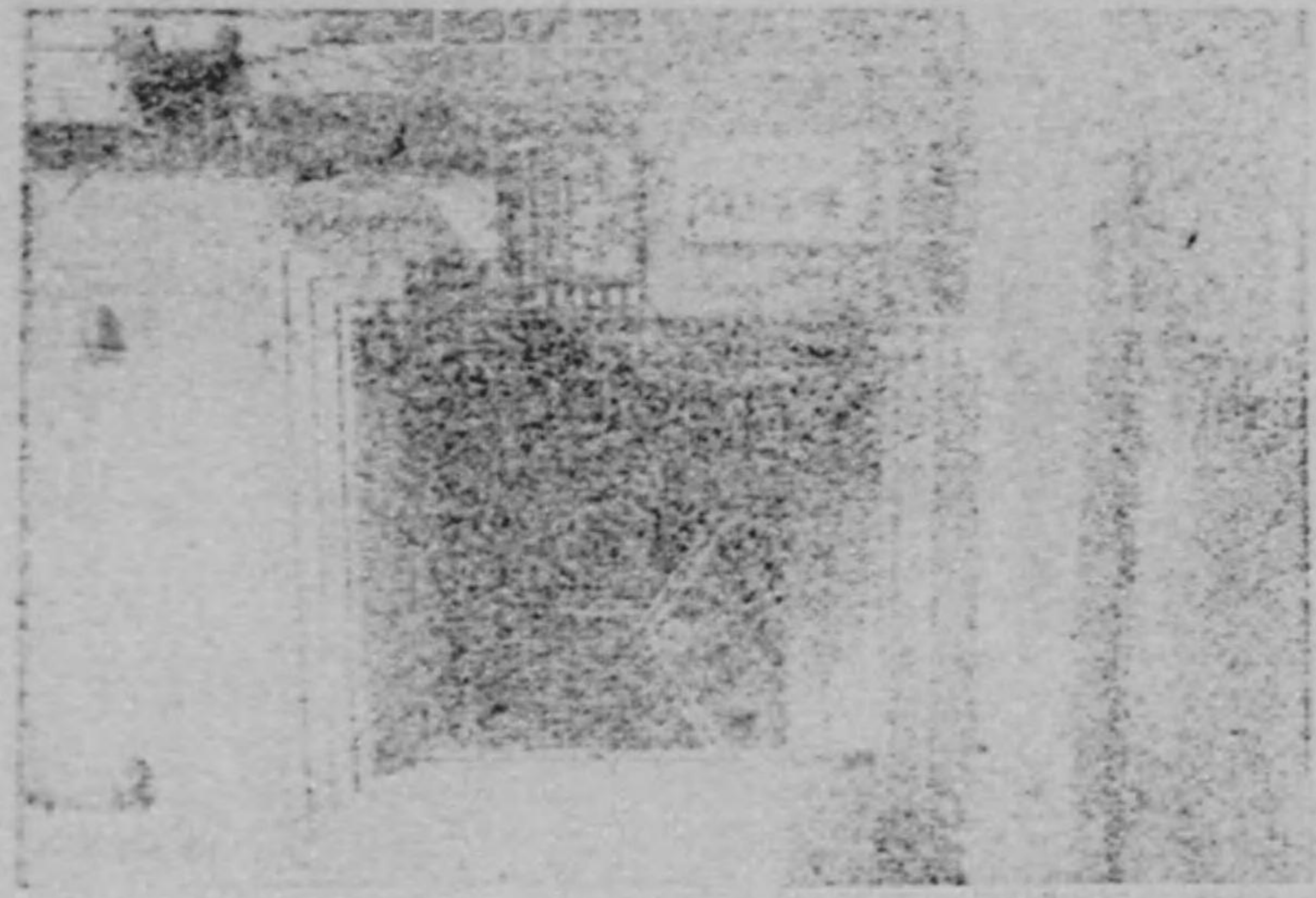


下圖は銀座、大阪カメラ日輪全景



上圖は實業ビルの地下室、麗人座の入口。此のカフェーは東京に於けるエロ、サーピンスの聖地。御賽錢の澤山ある人々は参詣して見らる可也。

\*この建物の長さは、  
 の距離。建築費は、  
 東京に於けるよりも、  
 人々の人口。並の  
 五回に於ける、



ムザ／＼と大阪商人の弄るがまゝに委せてゐる。

それに大阪女給の云ひ草が

「東京いふところはとて高尙で、モダンでシックな人達やと思つてましたけど、来て見てビツクリしまひてン、野暮な人ばかり仰山ゐるやはつて、すつきりした江戸つ見はんは滅多に來やはらしめへんが………チップかつて大阪のお客はんがたと呉れまつせ」  
 だとな。

今、大阪方の勢力きわめて侮りがたいとみてとつたか、せめて一人でも江戸つ見の負け嫌ひを示さなくてはいふので、六萬五千圓の改造費と、上方費六どもの膽をつぶすやうな宣傳戦を開始するといきまいてゐる。

「カフェーといふものゝ血と肉は、誰がなんちうたかて女給だす。」  
 と大阪方の經營者が云ふのである。

「この血と肉とに資本の金ピカを著せたら、誰だつて吸ひ寄せられずにはゐやしめへんが。食ふた



めに商賣するんやなくて、儲けるためにやつてるんだすさかい、うんと資本かけてチャンチャン儲けたらサツサと歸りまつさ。東京の人間みたいに大砲も打たんで戦争しやうなんて、そんな阿呆くさいこと出来まへんがナ。」

まさしく江戸つ兒の盡なし時代である。

けれども、タイガーは更生の意氣を示して、飽くまで牙城を死守してゐる。シイクに、そしてスマートに。

然し如何に意氣ごんでみたところが、大阪軍には叶はない。

先づ銀座カフェー界の王座を狙ふ銀座會館に行つて見給へ。あの海の底のやうに仄暗い室内で、客を擯殺するやうなウルトラ・サーピスを怠らないのある。客の方ではすっかり嬉しくなつて、思はずチップの五圓も奮發する。するとエロエロ女給がいふことに

「妾えの名刺あけますよつて、どうぞ一ベン遊びに来とくんははれ。」

勿論、彼女はアパートの獨り住居だ。どんな楽しい遊びに耽つたかは知らないが、チップ五圓奮發

した男の言に依れば、

「チップ五圓はダンゼン安いよ。兎に角安いよ。大阪女給は話せる。」  
だとさ。

銀座會館の三階には秘密の室もあると云はれ、女給の寄宿舎もすぐ近くにあつて、二三十人の女給が宿泊してゐるが、毎晩寄舎に寝るものはせいぜい五人か六人しか居ないと云ふ。そこで取締當局では憤然として銀座會館に八日間の營業停止を喰はした。

一、許可もないのにキャバレーなどと電飾するのは不届である。

一、幾度忠告しても紫光色の薄暗い室を改めないのは餘りに當局を嘗めすぎてゐる。

一、女給の風紀がなつちよらん。

等々、まだ外にも理由はいくらもあらう。

ムーランルージュの風車を氣取つたあの華美なネオンサインに對してまで、一方ならぬ反感を抱いてゐた關東方のカフェー業者は、このざまを見てやつと胸のムカムカするのが靜まつた。靜まらない

のは大阪のエロエロ女給で

「野暮な話しつたらあらへん」

とブンブン怒つた。それ程彼女たちは發展家なのである。

更に銀座西二丁目にはカフェー・スコットランドがあり、銀座三丁目にはカフェー純育。バー・ハリウッドなどがあつて、蒲田あたりのスターを始め某々監督たちが、俺を知つてたらうナ。妾しには見えがあるでせう——と云はぬばかりにふんぞり返つてゐたものだ。

四丁目にはバー・タンゴ。カフェー・ゴンドラが控え、大正のモガ丹稻子の烏料理バー丹頂、支那料理で萬珍、小料理の赤へうたん、 Grill 銀座、蒲焼ひさご——と、いやはや並べたゞけて胸がつかへさうである。

五丁目には竹葉亭を始め、カフェー・ライオン。タイガー。フォックスと獸物の陳列みたいであるが、タイガーなど大正から昭和の初期にかけては、断然カフェーの女主人公であり、この女給は華族のドラ息子どもとエロエロな珍聞を流したものである。

西五丁目にはカフェー・オデッサ。天金の天ぶらがあり、六丁目に進むと釋正食堂、松本樓本店、銀座食堂、小松食堂、バー・コロネーションなどがづらりと軒を並べてゐる。七丁目から八丁目へかけてカフェー・オリンピック。カフェー孔雀、モナミ、スペイン酒場、天ぶら天國、千疋屋等々、その外大デパートの三つの食堂が一日何千何萬かの人に喰はさう喰はさうの汗だくである。いつたい腹の空いた人間が何處にゐるのか、晝でもいゝから提灯つけて探してみたいものだ。

まだまだあければ、繡々園なんて文士共のよりつくバーや、東西もろもろの料理店を合算すると數百ある。

この銀座中心のカフェー、バーには二千人の女がウヨ／＼してゐるといふから驚くではないか。タイガー、美人座、ライオンなどのやうに五十人以上の女給群を擁してゐる店も多いから、その實數に於ては或はもつと多いかも知れぬ。これだけの女を數萬數十萬のモボや紳士や、政治家や、サラリイマンや、ありと凡ゆる男が狙ひ討をやつてゐるのだ。築地の署長さんがいくら逆立ちして貞操の美を説いても、締めた帯を結んでばかりはゐられない。況んや彼女たちも戀と情けを知る女である。すべ

ての流行が後から後から追撃して、ぐんぐんと彼女たちの収入を追抜くのだ。流行の先驅をなす銀座の中心で、流行遅れに我慢する苦痛は、現代の若い女に取つては自殺を強ひられるに等しい苦痛でなければならぬ。貞操固持と流行追慕の激しい戦ひを続け乍ら、遂に戦ひ切れなくなつて彼女たちはバツと明るく悪の花を開かして丁ふ。

一度失はれた貞操は、次の誘惑に對しては何等の抵抗力をも持たない。ランデ・ブウ、オーライ。ドライヴ、オーライ。郊外のホテル、オーライである。對手が毛虫のやうに嫌ひでさへなければ、共に歡を盡して時代の尖端を歩むことにのみ腐心する。

他人の収入をいつも自分のことのやうに考へてゐる香氣な統計家の想像によれば、銀座にバラ播かれるチップがこれを最少限度に見積つて年額百八十萬圓。多ければ參百萬圓を突破するであらうといふことだ。

更に彼女たちに提供するランデ・ブウの費用だとか、流行品のプレゼント、連れ出しに伴ふ一泊料の代金までも勘定に入れて見ると、約五六百萬圓の金が消費されるいふ。聞いたかものども——と云ひ

たくなるではないか。

銀座通の漫文家の言ふところによれば、

「なあに、店がどんなに大きくなつて、なにも女給ウエイトレスの前で小さくなつてゐる必要はありませんよ。僕に云はせれば彼女たちはまア圓タクみたいなものです。誰だつて乗る事が出来るんですから、指を喰へて見てゐる方がよつほど間抜け野郎ですア。」

「あゝしたとこの女といふものは」と漫文家がいふのである。

「へたに口説いたつて素人みたいなわけにはゆきませんや。色氣のない様な顔をしてチップを呉れて、そして臍が背中に廻るやうな冗談をカッ飛ばせて笑はせるのです。親しくなつてからだつて、君は僕の愛を受け容れて呉れる？など、古くさい文句を並べては絶対に駄目、そんな文句なら決して彼女たちのハートを刺戟しないことを断言します。眞面目に戀を要求して振られた位テレ臭いも

のはありませんから、振られるつもりで大膽卒直に突撃する方が効果があります。たとへば……

「どうだい、お前競馬は好きかい？」

「え、競馬はとても好きよ。」

「好きなら連れて行かうか。馬券があたつたら皆お前に呉れてやるよ。」

「ほんとう？」

「と来たらもう占めたものでさア。女つて奴は淺間しいですからネ。そんな時は萬一の僥倖をあてにして、もう次の買物のことを考へてゐる。それに男は色氣がなくて氣前がいゝと來てゐる。かうした印象を強く女の胸に刻みつけてをけば、既に十中八九までは彼女を連れ出すことは困難ではないですネ。」

顔と金とに自信のある方は試みたがよからう。振られて顔が赤くなるやうな人は、現代では戀する資格のない者である。

ウイスキー一杯や、コーヒー一杯で夜の花を摘み取らうとするのは、それは餘りに虫が好すぎる。欺

かれ騙され、むごたらしく放蕩した貞操の花辨をちつと悲しい眼付まで眺めてゐる女にとつては、愛だとか戀だとかいふ言葉の響きは、寧ろ憤りと輕侮の念を起さしめる以外に大した効能はないと見ねばならぬ。

カフェーでもバーでも、店を閉めるまで残つてゐる客の多く調べて見給へ。たいてい惱み疲れた面持で自棄に酒を煽つてゐる輩が多い。せめて女の歸途だけでも一緒に歩きたい—なんて、そんなケチな考へは扱けすてた方がいゝ。

若い癖にさうしたヘナチヨコ野郎が多いから、女の方ではサツサと中老の男と何處かのホテルへ雲がくねして了ふのだ。

それに女給といふ女給が悉く獨身者だと考へたら飛んでもない目に會はされる。少し大袈裟かも知れないが、銀座に二千人の女給がゐるとすれば、その三〇パーセントは誰かに獨占されてゐる女と見て間違ひはあるまい。

少し心ある者には對手に情夫があるかないか位の見當はすぐつく筈であるが、なアに、この頃の女

は情夫の有無など問題ではない——と云へば、なる程それも道理である。朝になつて酒々と夫の家に歸つて来る女だつて多いのだから、女給の情夫たるや又辛いな。

カフェーのことであつて夢中になつてしまつた。千疋屋の前から東側の夜店の舗道へ横切る。常に思ふのであるが、銀座街から早く電車が消えて了へば銀ブラ黨にはどんなに助かるか知れない。電車と自動車に脅やかされての横断には全くうんざりして了ふ。

二頭立の馬車が糞尿の垂れ流しをした時代に較べると餘り文句も云へないが、電車のために銀座の気分がぶち壊されること實に夥しい。せめて夜だけでも電車を通行止にできないものか。

「冗談云つちや困る。もう一本線をふやしたい位ぢや。」

といつても減収でベソをかいてゐる電氣局で怒るかナ。

全く暗い夜の闇に浮ぶ銀座の姿は美しい。

レヴェウのスターが皮膚と露はに照明燈に輝し出された艶麗無比のスタイルに似て、燦爛たるネオン・サインの下を流れる人の波は、さながら大きな舞臺をつくりだ。

——夜になると全く暗黒の中に埋れて了ふ大きな市街、宵から夢と睡眠に耽るより如何ともし難い市街、行燈とか提灯とかの微かな光のもとに早くから家の中に閉ぢこもつて了ふ人たち……と、ビエル・ロチを慨歎させたのは六十年前だ。もし生きてゐるならこのフランスの浪漫派作家に今日の夜の東京を見せてやりたいものだ。

明るすぎる舗道を歩いて、わざと室内を薄暗くした酒場のクッションに身をくねらせた時の氣持ちと、唇を眞紅に染めた女の差出す強いウ・スキイの香り、そして、やんわりと白い腕を投げかけられて輕快なジャズのレコードを聴いてゐれば、それだけでバーの享樂は譯山だ。

ビエル・ロチがゐたらどんなに喜ぶだらう。

銀座の宵は若い戀人同志の歩くところ。美しいマダムとそのハーフベターの買物をするところ。獨身者が威張つて歩く街ではない。

ピツタリと寄り添つて歩く洋裝の男女を、ジロジロと恨めしさうに見て廻る位なら、家に燻ぶつてラブレターの稽古でもした方がましである。コーヒー一杯で三時間もテーブルを占領してゐる不良學

生のみつきり増えたのも、獨り歩きが如何につまらないものであるかといふことを明かに立證してゐるではないか。それとも、夜店をひやかし、只漫然と通りすがりの女を眺め、ステッキ・ガールの存在をたしかめるために歩くのならこれは又別な問題である。

「かう申しては失禮では御座いますけれど、コーヒー一杯やソーダ水一杯で二時間も三時間も頑張られてはたまりません。不景氣になつたせいでか、身なりなどなかくりゆうつとした方に案外このパントヒーターマンが多いのですからネ。」

と某店のマネージャーがごぼす。パンと水のお客には耳が痛からう。

然し、さうかと思ふと一方にはとても物凄いや給もゐる。名前をあげるのは遠慮するが、××バーのM子としてを。

「あら、あなたまだウキスキーを召しあがるの。お金はいくらもつてゝ？え、五圓？ぢやあもういゝ加減に止して、あとはチップをいときなさいよ。ねえ！」

もちろん女は客のふるまひ酒に酔拂らつてはゐる。ちよつと信じ切れないが、事實だから仕方がな

い。五十圓チップのチップを大きな顔をして差出さうものなら、

「あらはのよ。もつてお歸りなさいよ。五十圓あれば圓タクに乗れるわよ！」

とソロンと淫ましてゐるのだから呆れ返つてものが云へない。ところが、彼女のかうした傲慢不遜な態度がすつかり氣に入つたといふので、毎度彼女に五圓のチップを與へた男がゐるのだから世の中は廣い。しかも彼女には若い學生の愛人があり、渋谷方面のあなバーに共同生活をいとむでゐる。

彼女の最後贖物を要求してゐるこの年若い金満家は、約二ヶ月の間に數百金を投じ、日頃の念願叶つて漸く郊外に彼女を連れだす約束に成功した。

約束の日は来た。約束の場所は東京驛の一二等の待合室、×月×日の午後六時かつきり。——然しなんと呪はれた日であつたらう。彼女は遂に彼を欺き、彼は彼女に欺かれ、耐え難き憤怒に身を顛はせて直ちに××バーを訪ねたが、その夜もその翌る夜も、それより遂に彼女は××バーから永久に姿を消してしまつたのである。

人並にチップは一圓にきめてをいたら、彼はさうした恥辱を受けなかつたらう。

彼女が憂鬱さうにしてゐる時はブランやウキスキイをジャンジャン飲ませてやり、それにナイト・ガウンだ、新しいコンバクトだ、千疋屋の果物だ、十圓もするストッキングだ——と金を惜まず投げ與へたのが不覺であつた。

西條八十氏の銀座節に

東京銀座は怖ろしところ、虎と獅子とが酌に出る。

たとへ百夜を来たればとて、チップ二十錢ちや惚れやせぬ。

だから金を自慢に女を侮つてはならぬ。要するにバカバカしい肩身を入れるのは、却つて積の種を自分でバラ播くに等しいものだ。

さて夜店をひやかしても別に欲しさうなものもない。ホテルに歸つて休むことにしやう。

### 銀座のモダン・ガール

たとへ一時間でも銀ブラをやらないと眠れないといふ詩人があつた。

そうかと思ふと又一方では、毎夜銀座のバーやカフェエを歩き廻つて、新らしい流行の話題を投げ散らし、それが一般的に擴まるのを、まるで富貴のあたるのをまつやうにしてゐる文士の一團もあつた。

新しい言葉の流行と、新しい衣類の流行の震源地銀座。それを新しい女はみな真似たがるのだ。流行遇れの野暮な人間を

「あの方とてもオオ・エスだわネ。」

と云つて得意げな顔をしたり、「勿論よ!」といふのを「モチさ」などと云つて澄してゐる。だから時代の尖端を歩まうとする程の女は、否が應でも銀座に出る。ではいつたいどんな女が歩くか?

背後にぞろ／＼とファンを引摺つて歩くキネマのスターや、わざと人混みの中にもぐりこんで、多くの男性からそちこち小突き廻されてその接觸の快感を味はふタッチング・ガール、色の生つ白いスマートな青年を連れて歩く不良マダム(この邊りの男をハンドバック・ボーイと呼んでゐることはこゝに説明するまでもなく、諸君の方で疾くに御承知であらう。)僕の知つてゐる女を一人一人諸君に御紹介しやう。本名を出すと彼女達に襲撃されて、またいろんな愚痴を並べられるから省略するが、その點は豫め御諒承を願ひたい。

ストリート・ガールA子

ストリート・ガールとは、以前は夜鷹遊藝、又は高等内侍とも云つた街頭の淫賣婦と同じ種類のものだと思へば間違ひない。只服装や教養などの點に多少の相異があるだけである。

震災直後は夜の九時十時頃になると、殆んど軒並と云つてもいい、位遊藝が拔擢したが、今日では警戒が嚴重なためにさう澤山はゐない。A子などもストリート・ガールの一人であるが、A子に限らず彼女たちはすべて毎晩稼ぎに出るやうなへまな淫賣婦ではない。多くて月に五六回も稼げば關の山で

ある。

彼女たちが斯くも大膽なエロ振りを發揮して容易に警官に捕まらないのは、つまりこの稼ぐ回数少いことに起因する。勿論、對手が如何なる人間であるかを看破する第六感の働らきも鋭敏ではあるが、それは第二第三の問題である。A子などは餘程困惑した場合とか、欲しくて欲しくて耐らない品物が買へない場合の外は、この悲しい危険な遊藝はやらないことにしてゐる。それに誰が見たつてA子が淫賣婦だつてことは夢にも信じないであらう。どう見たつて彼女は良家の令嬢か、でなければ新歸朝者の若いマドンナのやうにしか見えないのだ。よく知つたかぶりをするペダンチストは、これらのストリート・ガールは自分の方から積極的にモーションをかけるやうなことを云つてゐるが、それは他人の噂を鵜呑みにしたヨタである。A子などは必ず男の方からモーションをかけるやうに仕向け万一のことがあつても、いつでも古くからの知己であるかのやうに装ふことを忘れない。

あるストリート・ガールなどは、良いムク鳥のモボを釣つて某所の砂風呂旅館に投宿し、朝になつて男には宿泊料もなかつたといふ喜悲劇があるが、いまのストリート・ガールは金があると腕んだ人間



以外にはモーションを仕向けさせない方針を取つてゐる。

ほかのストリート・ガールはどうだか知らないが、A子は街頭に立つて通りすがりの男に片目會圖カインクをしたり、不意に話しかけたりなどするやうな危険は冒さない。一流の喫茶店かダンス・ホールなどに出入して巧妙にいゝ機會を狙ふ種類の女である。

小野田素夢氏の銀座通にはストリート・ガールに就て次の三種類をあけてゐる。

接觸 背後から足早にやつて来て通り抜ける際に軽く接觸して、三四歩前に出てから振かへる。

張込 横丁の暗がりになゝすんでゐて、口笛を吹いたり笑ひかけたりして「あのう」と話しかける。

乗込 病氣のふりをして男の乗つてゐる自動車を呼び止めて乗り込む。

そして彼女たちの出現する場所に就ては

接觸 銀座通りの舗道ペドスト。

張込 有樂町驛から銀座教會附近、新橋と土橋の間博品館の横手。京橋の共同便所附近等。

乗込 京橋日吉町から對鶴ビル附近。

とあるから、獵派の人たちは大いに出かけたがよろしい。但し彼女たちを探すのに和服や汚れた服装をしてゐたのでは駄目である。飽迄華酒で輕快なスタイルをし、眞面目とも不眞面目とも見當のつかないやうな顔をしてゐなければならぬ。

蟹股の歩きぶりや、ひどく酔拂つてゐたのでは、女の方で怖れをなすといふからその困難さを通り抜けて、あせらず騒がず根氣第一に探すべきである。實探しのつもりで……

不良マダムB子

B子夫人は若い頃文學少女であつた。彼女がまるで畑邊ひのS氏と結婚しやうなどとは豫想だにもしなかつたが、S氏とは東京の兜町あたりでも相當知られた地場の大手筋と目される相場師である。僕は三日目に一度位は必ず若い男を連れて歩く彼女に會ふ。B子夫人の言によれば

「ほんとうに妾し自分で、ひどいフラッパーになつたと思ふわ。だつてもとはと云へばみんな妾しのハズが悪いのよ。妾しの趣味をちつとも理解してくれないのはまだいゝとして、この一二年來すつかり自分が調子づいて來ると、もう妾なんか如何だつていゝんですものネ。それあ男ですからた

まに藝者あそびもいゝですわ。だけどこの頃はどこか銀座の女給さんを妾めかけとか足かけとかにしちまつて滅多に妾しの家へは歸らないんでせう。愛情つてものは男が女にばかり要求するものではないと思ふわ。貴方はどう思ふ？男の方で愛を折半する位だつたら、女の方だつてその不足分を補はなければつまらないわ。ねえさうでせう。だから妾しこの頃すつかり自棄蕪になつちまつて、夫が家をあける時はかうして銀座に出て来るのよ。どうせ外出するなら一人で歩いてねえ……」

と、それから先は彼女は何事も云はないで「オホホ……」と笑つた。

つまり今日不良マダムと目される女は、自分の夫によつて充たされない氣持を抱く女、未亡人、誰かの愛妾などで、そのうちでも尖端意識を多分に有する女である。

## ステツキ・ガールC子

ステツキ・ガールといふことを最初に云ひ始めたのは文壇の不良新居格氏だといふ。その眞偽は別として、いち早く之を報道したのは雜誌新青年のゴシップ氏であつたと思ふ。たしか一九二九年の春であつたらう。新聞に出たのはそれからすつと後である。同年の春に丸ビルの二階にある丸菱呉服店

がマネキン・ガールの皮切をやつてから間もなくこのステツキ・ガールといふ文字が見え始めた。ほんとうに出現したのは昭和五年の三月からだといふが、今尚ほ依然として不明である。

で、一應こゝにステツキ・ガールの出所及び文獻を紹介するのは相當意義のあることと思ふ。なんとなればこの國産英語は今や日本よりハリイ牛山によつて米國に輸出され、米國のハリウッドから更に英本國へと進出し、それがいち早く巴里にまで傳はつたといふ世界的な文字にならんとしつゝあるからだ。

昭和四年五月號 (店頭へは四月四五日頃出たから雜誌新青年で原稿を作つたのは早くも三月初旬)の「よろすこんさんと」といふゴシップ欄に

○小生いつの頃よりか銀座ぶらつき病にとりつかれ、今日では夜なく銀座へ現はれなくては發熱するの狀態と相成申候。さるにても彼の一對づ、仲よく歩行する人種を見るに耐へず、さればとて銀座行を中止すれば如上の如き有様。小生只今十字路に立つて迷ふ事切に御座候。何とか良き解決策は無之ものに候や。尙、小生……散々對手の彼女を作るには餘りに醜男に御座候。(憂鬱居士)

●御煩悶の程重々御察申上候。世間も餘程進みしものに御座候。記者そく聞する處によれば、近時五十錢娘なるもの銀座街頭に出現致し、彼の京橋より新橋に至る間を五十錢にて誰方の散歩對手をも相務め候由に御座候。

得々然たる彼等一對人種も豈はからんや新かる喰はせ物の類甚だ多しと睨み申候。御安心ありて銀座へ現はれ候へ。(五十錢娘は實は純然たる散歩用なること御断はり申置候)

このヨタ記事にはステツキ・ガールの文句は使つてないが、これがステツキ・ガールといふ文字を生み出した皮切ではあるまいか。

續いて週間朝日一九二九年四月の中旬すぎ？小野田素夢氏の「銀座春のナンセンス」が掲載され、その中の一節に

「……………近頃は一時間二圓で散歩のお伴をいたしませうといふ女が現はれたんだぜ。」

「といふと、矢張りストリート・ガールぢやないか。」

「否々。つまり二圓のチップさへ出せば一時間だけはラザアなりワイフなり、こちらの望み次第の

風を装つて一緒に散歩してくれる女なのさ。お前あなたで引張り廻される女なんだ……………」

右の二つは果してどちらが先に考案したものか知らないが、兎に角ジャーナリズムの視聽を集め、急速なテンポで世上に流布され、ステツキ・ガールといふものが事實あるかどうか分りもしないのに、警察では嚴重な取締りを始めたといふから、一生懸命に暖簾に腕押をやつたわけである。

かうした流説はモボやモガの好奇心をいやが上にも唆り立てた。女も男も共に血眼になつてステツキ・ガールとやらを探し出さむものと、足の疲れなんかなんかのそのとばかり、新橋から京橋までの間を一夜に八回歩き廻つたが遂に發見出来なかつたところほしたモボがある。蓋しナンセンスの逸品であらう。

赤坂の溜池ダンス・ホールがお灸を据えられて、その爲に失業の憂目を見たC子はあちこちフラつき廻つた揚句、ぐんなりして僕の所へ訪れた。そしてさも思ひ餘つたやうに

「ネエKさん、ほんとうにステツキ・ガールつてゐるの？」

と僕に質問を浴びせたのはまだ櫻の咲かない頃であつた。僕もハッキリした自信はなかつたが、半

ば押搦つもりで

「あるさ。僕は第一相互館の角で素的な未知の美人に話しかけられて一緒に歩いたよ。お茶でも召上らない？といふから、資生堂へ入つてコーヒーまで飲んで来たさ。」

と答へると、

「アーラ、さう。では妾しもやつてみやうか知ら。でも骨が折れるわネエ！」と来た。

「なアに、たやすいことさ。少しケバ／＼しいみなりをして、氣取りやのモボに魅力のあるウインクを送れば、先方はきつと何か云つて近寄るさ。その時思ひ切つて云へば何でもない。」

「さう、ぢやあ妾し一ベンしてみるわ。」

多分に茶目氣のある彼女のことだから早速それを實行した。ところがそれから二三日経つて再び僕の所へやつて来て、

「妾しほんとうに困つたこととして了つたわ。あなたのいふ通りにして、若いスマートな青年に惹

を遣つたのよ。するとネ、なる程うなたの仰言る通り先方から近づいて来たわ。そして、妾しの方からまだ何も云はないのに

「あなたはステツキ・ガール」といふから

「え、さうよ！」と妾が答へたの。

「さう、では僕と一緒に歩きませう」つていふから、あゝ助かつたと思つて、新橋、京橋間の東西の舗道を二圓で歩く約束をしたのよ。そしていろいろ話してゐる間に、その人が新聞社にゐるつてことがわかつたわ。……………」

果して他にも事實かどうかは知らないが、後にも先にも只一回、彼女C子が實際にステツキ・ガールになつたことだけは眞實だ。

スピーキング・ガールD子

スピーキング・ガールとは話し相手である。つまり、カフェーや喫茶店で男ひとりが退屈さうにしてゐると、ツカ／＼と近寄つていろんな話題を提供するといふ珍職業。

然しこんな女は実際にはゐない。ジャアナリストがいゝ加減な出鱈目記事を飛ばして勝手につくりあげた架空的存在である。

D子などはスピーキング・ガールとして感嘆ひされた女の一人だ。といふのは、彼女は平氣の平左で銀座のどんなカフェーや喫茶店へでも獨りで入つて行く。而も頻々として毎夜の如くオリンピックとか、モナミとか、不二家などへ行くのだ。

彼女には映畫雜誌記者といふ立派な職業があり、その職業柄多くの知人がある。

だから、どこへ行つても必ず一人や二人の男の知己があり、卓を離れてすぐに相手の男に話をしかける。顔は綺麗だし、風彩はケバケバしい。それを端の岡橋連が迂散臭い眼で眺める。

「あの女はあれは何者だらう。」

「ストリート・ガールだらう！」

「さうぢやないよ。あれは單に話し相手だけするスピーキング・ガールなのだ。」  
などゝ摩登派作家などがついヨタを飛ばす。

これでスピーキング・ガールなるものゝ正體がお判りになつたでせう。

さて以上の外に圓タク・ガールのE子、マニキュワ・ガールのF子、エンゲルス・ガールのH子などゝいろいろ残つてゐますが、尖端ガールの紹介はそれ位にしてをいて、銀座附近の高等魔窟を紹介しませう。

「なに、銀座の近くに魔窟がある？」

とビックリなさる人もあると思ひますが、事實あるのだから仕方がない。

魔の家に出入する女

場所は數寄屋橋と土橋の間——それだけ云へば「ハハア、あそこか？」と氣の付くほどエロトマニアの間では有名な家である。

待合でもなし、料理屋でもなし、と云つて勿論邸宅向きの家ではない。場所柄には珍らしい粋な格子作りの構へである。

この不可思議な家に最初僕を紹介して呉れたのは新聞記者のA氏だ。

彼は屢々出入してゐると見えて、その上品な女中に對しても、

「おい、どうだい。今日は立派な御大家の旦那と一緒に来たのだから、うんと素晴らしい玉を見つけたいネ。」

と、ズバ／＼真向から切下けるほど親しい間柄である。

案内された奥の八畳間は掃切られた襦をはじめ、床、連ひ棚など迎も立派な出来栄で、差出された混布茶の味もトロリとしてなかくの風味である。

「君はどんな女がいゝかネ。素人娘か、それとも年増の未亡人がいゝかネ。遠慮はゐらないから、好きなのを註文し給へ。こゝでは酒も飲めないし、料理も出しては呉れないが、對手にする女は氣に入らなければ取換へがきくんだ。立人の女は出入しないのだから、待合や廊とはまるで違ふだらうネ。」

家の中は森雨として何等の物音もしない。傍らで女中がニヤ／＼笑ひ乍ら聴いてゐるだけだ。餘りの静けさに體が何となく硬ばるやうである。而も戸外には眞晝間の日がカンカン照つてゐるし、おま

けに二人とも酒氣さへ帯びてゐない。テレ臭いこと限りなしである。だが、このテレ臭いところに面白味があるので、恥を忍んで極り悪さうにやつてくる女をチラリと眺める瞬間が狙ひどころだとAが云ふ。

後頼した若い娘と、中年の令夫人らしい二人の女が裏木戸からそつとこの家に入りこんだのはそれから一時間半位経つた後である。

その時は既に僕たちは二階の薄暗い部屋に別々に寝かされてゐた。

あとはすべて無言の劇である。女がどんなに綺麗な顔をして羽織をぬいだか、どんな思ひをして僕の顔を覗めたか、それは忘れたことにしてをかう。所も知らぬ名も知らぬ男と女が、冗談口一つ利かないで一瞬の戯れに耽るのである。

此家のマダムはもと新橋で左様をとつた相當の賣れつ見で、こんな商賣を始める前は立派な旦那がついてゐた。やつと四十の坂を越えたばかりであらう。瑞々しい太り肉の體には、まだ十二分の魅力があるが、初手の客にも優しい態度を示して呉れて、何となく懐かしい感じを抱かせる。マダムの言

に依れば、決して素情の怪しい女は出入しないのださうで、中流以上の夫人や、デパートの女や、れつきとした旦那を持つお妻さんなどが大部分を締めてゐるといふことである。

金につまされて来る人もあるが、さうでない人もあるのだから、對手の名前や住所をホジクルことはまかりならぬといふ規定になつてゐるのも面白い。

万一の場合の用意は抜目なく準備されて、床の間の懸抽の後ろには壁がなく、壁と同じ色の張戸がある。軽く押してもスウーと開いて次の間から、階下に降りるやうに別の階段がついてゐて、音のないやうに厚い布が敷かれてゐるなど、探偵小説の材料にでもなりさうだ。

絶對的に信頼出来る人以外には、たとへ現なま千圓積んでも泊めては呉れぬといふ非合法的な享樂機關だけに、社會的に堂々たる地位のある人さへ、屢々この家の門をくぐるのである。

その代り、時間も長くて二時間位に制限され、女にとつても長く引き止められることは困るのである。

僕は禁制を破つて彼女に、

「どういふ事情があつてこんなところにゐらつしやるのです？」

と訊いたところ、

「では、殿方はどうして浮氣をなさるのでせう？」

と逆襲された。

言はず語らずに、彼女の不満が那邊にあるかをハッキリ僕に示指してくれた。

### 將來の銀座

さて、以上述べたやうに銀座の將來は底知れない發展性をもつてゐる。

銀座が賑はふのは何故か？なんて、そんな野暮な理屈はこね廻さない方がよからう。

銀座附近に散在する大劇場だけでも日比谷に帝國劇場、數寄屋橋畔に邦樂座、それと並んで目下建築中の日本映畫劇場、築地に歌舞伎座、そのすぐ近くに東京劇場、少し先に行つて新橋演舞場、計劃中のものに日比谷太神宮跡の日比谷劇場と、内幸町の銀座劇場などがある。而もそれは悉く二千人以

上三千人に達する収容力を有する近代的な大建築だ。

今日、貴族や富豪の家族たちは、この大劇場を唯一の歡樂場にしてゐる。云ふまでもなくマダムやマドモアゼルの歡樂舞であつて、男子はどんな所にも自由に出入する。

全くこれらの大劇場の一二等席には、純煙豪者を極めた婦人たちが、春の野に進ぶ胡蝶のやうに詰めてゐる。

劇場の廊下は彼女たちのよき社交場であり、劇場の休憩室こそ彼女たちの戀を囁く所である。而も開幕中は、橘屋、音羽屋、幡磨屋などの男生的な科白と、片肌抜いだ勇ましい姿に酔ひ、忘れてゐた涙といふものをボロボロと流す。

三階席の大衆は、これまたさうした女を一人々々見較べるのが、芝居と共に楽しい氣分の一つであらう。

かくて、建築中の大劇場が竣工の曉には、映畫と劇の觀覽者だけが一日五萬人を突破し、引跡に銀座へ！銀座へと雪崩れこむことを想像して見給へ。現在よりも更に更に光輝燦爛たる一大歡樂舞とし

ての銀座の光景が思ひやられるではありませんか。

それにつれてエロ風景も一段と進展し、我々の豫想だになし得ない新しい風俗が次々と生れ出ることが考へられる。

地上の歡樂舞と、地下數十尺の歡樂舞！秘密室のあるカフェーや、怪奇な電氣裝置の扉のついたダンス・ホール、簡易輕便な連込専門の大ホテル、女優の群や、ストリート・ガールが各々男と手を組んだ爽快な風景等々、清濁一切の混沌たる妖氣が、華かなネオン・サインの輝きと共に益々ひろがることであらう！さうなれば我々は酔ひ疲れた足を引摺つて、夜更けの街を彷徨しなくてもすむやうになる。

「まア、するぶん酔つて了ひましたのネ。奥の部屋で暫らく休んでゐらしたら如何？」

といふ可愛いウエトレスも出て来るであらうし、

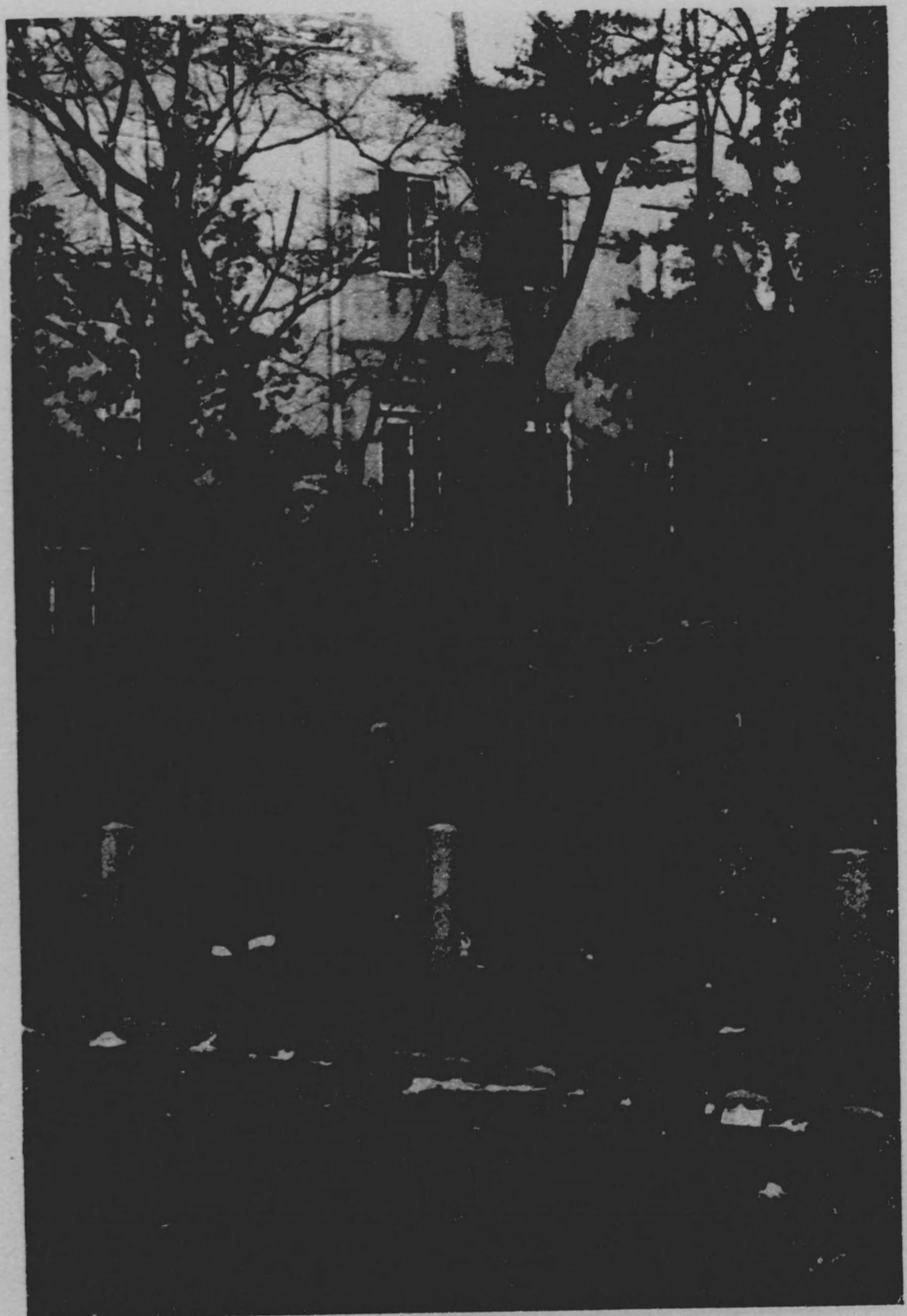
「あゝ、羨し草疲ちやつたわ！もう踊るのは止して下さいさらない？」

と甘つたるくしなだれかかるダンサーも出て来やう！



それまでには日本の景氣も恢復し、日本の東京をめざして、享樂の限りを貪りにくる世界各国の人たちも増加するだらう！

第二章 夜の浅草



カツノ・フォーリーの裏で天女の歸りを待つ人々のスナップ

車夫の導く怪しき家  
貞操と十銭銀貨  
樂屋裏覗き  
吉原夜話

### 車夫の導く怪しき家

銀座が東京の心臓なら、浅草は東京のお尻である。と云つても輕蔑した意味ではないから感違ひされる。と困る。

田舎の來客をイの一番に案内するのは、普通の家庭ではたいてい浅草が皮切だ。

浅草寺觀世音の參詣人一日平均五六萬、賽錢の上り高年額十萬圓以上、その又賽錢箱が縦一丈六尺三寸五分、横一丈四寸六分、高さ二尺三寸、おまけに底には穴藏があるといふから惣の皮が厚い。

觀世音の古事來歴などは省略するが、浅草が今日帝都唯一の歡樂郷となつたのは、この觀音さまのお蔭である。

夜も晝も浅草だけは人の波で身動きが取れない。雷門停留所から一丁程東が隅田の大川端、その手前に地下鐵の高い塔、下車したすぐ前が有名な仲店通り、この通りを一見すると直ちに浅草氣分が湧いて来る。

然し震災前の浅草と比較すれば、現在の浅草は僕たちには實に物足りない。なる程、観音さまの境内を通り抜けて横に折れると、小さな池を中心に浅草六區の一大歌樂那が出現する。

劇場では公園劇、観音劇場、喜劇春秋座、昭和座、常盤座などがあり、チャンバラ劇、三流以下の歌舞伎、エロエロ・レヴユウ等、一圓五拾銭も出せば特等席にふんぞり返ることが出来るのだ。映畫では帝國館、電気館、千代田館、日本館、大東京、松竹座、富士館、東京クラブなどが巍然と聳えてゐる。それに浪花節だ、萬歳だ、水族館のカジノ・フォーリーのエログロレヴユウ、花屋敷の廻轉木馬、いやその騒々しいこと到底筆では書きつくせない。

そしてこれらの劇場街を取巻くものは殆んど壽司屋と天ぷら屋だ。これを見ても浅草と云ふ所が、いかに多くの人間を安く遊ばせやうと苦心してゐるか、わかるだらう。

然し、諸君に映畫の説明をしたり、壽司や天ぷらの話をしたのでは恐らく鼻もひつかけまい。だから、現在の浅草が物足りないと言つたのだ。

震災前、浅草名物の高い十二階の塔があつた頃は、夜の帷に包まれると、そこら一帯に漲る気分は晝の浅草とは全く別物の感があつた。十二階下に咲く闇の花をめぐりて殺倒する人の群や、甲高い女の叫び聲、縫れ合ふ男女の姿など、今の浅草からは全くその姿を掻き消してゐる。

立ち並ぶ露店で安プランをぐつと二三杯煽りつけて、ボウツと上氣した頬を冷い夜風に晒しつつ、鼻唄うたつて女をひやかした思ひ出は、今顧みてもまことに懐しいものではある。

又オペラ全盛を極めた頃の浅草も、今のレヴユウ全盛時代より遙かにエロ氣分が濃厚であつた。樂屋裏から待合でも料理屋でも、客が招けば何處にでもついて行つたデカタン女優も、今はどこにどうして居ることやら。

只、僅かに木村時子が獨り浅草に踏み止まつてゐるだけだ。然し、彼女とてすつかり容色も衰へたし、當時の妖艶な面影は微塵もない。

オペラ女優たちが樂屋でズロースをはき換へるのが見たいばかりに、公園劇場の二階から、一心に金龍館の舞臺裏を眺めたのも哀れ遠い昔の夢。黒い腋毛を舞臺の直前で差覗いたのも一と昔前だ。

劇場が閉ねてお酒を呑んで、馬道から千束の私娼窟を彷徨ふのが唯一の楽しみであつた僕たちは、最近では浅草などへ行きたくもない。新式の大建築劇場は別として、他の映畫館や見世物小屋に一步足を踏み入れて見給へ！異様な臭氣と便所の匂ひが錯雜して、全く胸がムカ／＼して來るではないか。魔窟に對する僕たちの興味は、そこに卑俗だとか不潔だとかいふ常識を通り越してゐるものがあるからだ。嘘も眞も徹底してゐる。

魔窟のことは後で詳しく書くことにするが、千束の花街から更に山谷を越えて吉原に遊歩する。これがその頃の若い人たちが浅草に出る目的であつた。

浅草へ——といふ氣持の中には、直ちに千束と吉原が附隨してゐたけれど、今ではそれが二つに切り離されてゐる。

芝居を見るなら浅草はつまらい。映畫ならワザワザ浅草まで出かけなくともよろしい。新しい人々が浅草へ行かないのはそのためだ。子供連の夫婦、お上りさん案内、店員、若干の學生と下級サラリーマン。商人、労働者が現代浅草の主なお客である。

安いから大衆的だ。大衆的だから安いといふ因果關係によつて、兎も角、浅草は帝都でいちばん人出が多い。

不眠ばかり云つても埒があかぬ。そこでもつと丹念に浅草のエロを探してみやうと、不承を夜の九時すぎ頃から浅草に出た。

いつものやうにリュウツとした英國形の紳士ではない。大島耕の上下に、茶色のチエツコスロバキヤ帽、ステッキだけは常用のもので、左手は懐ろに捻ぢ込こんだ若旦那風である。

「まあ珍らしい。今日はすつかり若旦那になつたのネ。」

カフエー・オリエントの階下の階つ子に陣取ると、いきなりかう云つて古顔のK子が寄つて來た。丸ボチヤの内感的な頬に唇がクルクルと廻つてゐる。

「たまには浅草にだつて來るものよ。どうして永いことゐらつしやらなかつたの？」

「浅草は嫌ひだよ！」

「アーラ。妾しがゐるても！」

「お前がゐるから尙更嫌ひだ。」

「どうして？」

「いふことをきかないから。」

「嘘よ、きくわよう。いつ妾しがきかなかつた？」

「では、お前は今日もズロースをしてゐるだらう！」

「えゝ！」

と、彼女の頬がボツと赫くなる。

「では、こゝでそれを外してごらん！」

「いやつ！」

と、彼女の平手が僕の頬べたに飛んだ。こんな工合に詰らない押問答をして、兎も角も酒を呑んだ。重大な役目を持つて歩き廻るのだから素顔ではまづい。

あつさり不巫戯けてほろ酔ひ機嫌、彼女と別れて淺草公園の方へ向つて靜かに歩む。

「なんの因果のゆえやらん、兩眼盲ひましまして……」

と、謙曲螺丸の一節を咬み乍ら千鳥足の恰好だ。歡樂郷案内も樂ではない。

すると背後から

「旦那！もしちよつと旦那！」

と呼びかける人の聲。いよいよ出たなと後ろを振り向く。

「どうです。御遊びには馴れてるやうで御座んすが、ひとつ面白い所へ御案内しませうか、色里や待合とは又氣分が變つて、對手はずぶの素人で御座んす。それも法外に高い値段や、おかしな酌辯對手では御座んせん。ねえ旦那！」

と附き纏うてきた。

圓タクの洪水にその職を奪はれた人力車夫は、かうして巧みに注網を潜り抜けつゝ誘惑の手をのばす。以前は腹がけ井に股引姿で誘ひかけ、客がうんと云つて承諾すると、すぐさま「小車 幌をかけ」で走り出したものだが、近頃はラシヤの筒袖外套に麻草履などつつかけてゐる。そして、自分で車

は引かないで、すぐに圓タクを呼び止めるから豪勢なもの。愚圖々々してゐて刑事にでも掴まらうものならそれこそ大變だ。彼等にもホスピード時代が襲ひかゝつてゐる。

「で、その面白い所つてのは遠いのかネ。」

「どうしまして、すぐその先でございます。」

そこで僕も糞度胸を据えた。まさかなぶり殺しにされるやうなこともあるまい。

「よし行かう！だが、だいたいの入費を聽いてをかないと、あとで足りないなんて云はれると困るからナ。」

「チへへへ……御冗談でせう。なげに、その點はどうにでもなりますよ。まさか三十圓も五拾圓も頂かうとは云やしませんから。また旦那だつて一度に五人も十人も女を買つたつて仕様がござんせんからネ。」

「そんなら君に委す。」

酒の利目で臍つ玉が多少膨脹してゐる。それから自動車に乗つて薄暗い通りをグルグル廻つた。藝

て車がピタリと止まつたのが、同じ淺草區内の×中町附近である。

やゝこしい露路裏を二つ三つ曲つたやうに記憶してゐるが、餘り芳ばしくもないし、またや作りの二階家である。

「おやまああらつしやいまし。さあどうぞ。甚さん御苦勞だつたわねえ。すつとお上り。」

この家の主婦であらう。豆を煎るやうな歯切れのいい句調が、なんとなく姉御と云つた感じである。

「旦那、お酒を召し上る？」と云ふから、

「あゝ呑むよ！」

と答へたら早速二階へ通された。重ね簾筥や箱入の大きな人形、成田神社の祭禮札など下町情調濃厚である。

やがて、すぶの素人だといふ女が主婦と一緒に二階に上つて、羞恥を含んだ面を斜に向けてポツンと坐つた。

なにがすぶの素人だと云ひたい御面附である。もしかすると何處かの寄席にでも出てゐる囃子の

人かも知れない。然し、今更、引込みもつかないので大いにはしやきたい氣持が鬱勃として胸の底から湧き上つてくる。

「なアおい、おばさん。こんないゝ娘さんがゐるのならもう三人呼んで貰へないかネ。」

「まアやな方！今晚の貴方の奥さんは、チャンとこゝにゐるぢやないの！」

「でもたつた一人では心細いよ。二三人束になつてゐないとネ。」

「オホホホ、でもそんなことするもんぢやないわよ。」

「出来なきあつまんないから歸るよ。」

勿論、僕は冗談のつもりで言つたのである。然るに豈計らんや、主婦の眼差が異様にエロチックな輝きを帯びて来た。

そして、すぶの素人だといふその女に何か耳打をして、二人で階下に姿を消し、再びやつて来た時には

「ほんとうにあんたはやんちや坊ネ。ぢやいゝわ。その代りこんなこと他所で言ひつこなしよ。」

と、もう二人といふ所を一人に値切つて、都合二人の女を與へて呉れるといふのである。

次に来た女はこれも素人ではないらしい。眼の色から、皮膚を看察すると、どうみても一人や二人位子供を生んだことのある女である。只、黙々として酒をつぐばかりで、彼女たちはそつと見合つては苦笑してゐる。

「どうだい、姉さんたちは、この家以外にもあちこち出入するのかい？」

女たちは甚だしく自尊を傷つけられたかたちでツンとしてゐる。然し、僕はそんなことには昔から無頓着である。

「これから、喧嘩はしないでらうネ。喧嘩をするくらゐだつたら、今のうちに御免を蒙る！」と云つたら

「喧嘩なんかしないわよ。ホホホ。」

と始めて機嫌よく笑つた。

一人は細い、一人は小肥りのいゝコントラストである。



「まアいやだわねえ。」

「あたし、あなた見たいな人に會ふのは始めてだわ。」

「羨しもよ！」

女たちは面白さうにいつまでも笑つた。

或は諸君のうちでも、いつどこでこつた誘惑にかゝらぬとも限らない。最も大切なことは決して臆病風を吹かさないことである。一旦、弱々しさうな態度を見せたが最後、どこまでつけこまれるか見當がつかぬ。

飛んでもない美人局にかゝらないやうに充分の警戒と、觀察力とが必要であると言ふまでもないが一番安全なのは誘惑を避けることである。

僕のやうに悲壯な決意と、身を挺して探求するやうなアヴァンチュールは、諸君のいとしき彼女のために御止めになつたが得策であらう。

その翌る朝、疲れ切つた體を深くタクシイのクッションに埋めて、隅田川の川端を疾走する時には、

日は既に川下の高い工場の屋根の上に輝いてゐた。

「さて、今晚は久しぶりで吉原にでも行かうかな。」

と、かう口の中で呟いて、自分ながら自分の精力絶倫に獨りで快心の微笑を漏らすのであつた。

### 貞操と十錢銀貨

吉原に遊ぶ前に、淺草詰談を一つ紹介しませう。

「一夜に登萬圓投げ出すから、俺の云ふことを聞いて呉れるか。」

かう云つて素つ氣なく放ねつけられた銀行の頭取がある。しかも對手は藝妓だ。

「十錢出すが……………」

「十錢ぢやいやだよ！」

これは乞食の會話である。

嚴寒の凍りつくやうな夜でも、淺草寺觀音さまの本堂の椽下では、必ず二十人か三十人の浮浪人が

寝轉んでゐる。夏の夜はベンチのそちこちや、木の下落に無数の乞食がゴロついてゐる。淺草を根じろにしてゐる乞食はその數五百人に達すと云はれてゐるが、女の乞食たるや極めて寥々たるもの。然し、いくら乞食と雖も食慾と性慾の羈絆からは脱することが出来ない。さればと云つて彼等はその性的衝動を癒すべき場所はどこにもないのだ。

彼等の中に交る女こそ實に蜜蜂の女王にも等しい。

然し、その女王にも等しい女の口から

「十錢ぢやいやだよ！」

といふ言葉が出るのだから、この際の五錢白銅が如何に絶大なる偉力をもつてゐることが。

笑へない喜劇である。

夜の十一時すぎると、乞食ではないけれど、貞操の押賣りをする女が物の怪のやうに三々伍々と現はれる。

彼女たちが捕へたムク鳥は何處へ連れて行かれる？

木の蔭や、薄暗いベンチ、共同便所、それが彼女たちの本部屋なのだ。

悲しい勤めではないか？

安いから大衆的だ。大衆的だから安いといふ因果關係は通り越してゐる。

### レヴユウの樂屋裏覗き

カジノ・フォーリーが淺草に旗あげしてからといふもの、一時淺草はレヴユウでなければ、夜も日もあけぬありさまとなつた。

エロチシズムに渴き切つてゐた大衆の意氣にピタリと投合したのであらう！

クララ・ボウなどがスクリーンの上で、旺んにあの挑發的な尻を振廻すものだから、映畫ではどうも物足りなさを感じてゐた連中には渡りに舟の好機會であつた。

若々しいやつと成熟しかけた女たちが、靴下もはかずに滑らかな脚を丸出しにして放ね廻るのだから、誰が見たつて氣持の悪からう筈はない。

尤も靴下をはかないのはすぐ破れてもつたないといふ経済的理由が主なのだが——  
續いてオペラの古強者河合澄子が乗り出し、前から膳立てだけして機会を狙つてゐた松竹興業會社  
が大袈裟に旗あけしてレヴュウの意氣はいよ／＼あがつた。

映畫館では「スター連中がファンの皆様にお目にかゝりたいと云ひますから」と出鱈目な理屈をこ  
ね廻して、幕合に唄を歌はせたり、踊りをやらせなければ客脚が減るといふ素晴しさである。  
スターこそいゝ面の皮だ。

淺草の水族館の踊り子などは

「今夜會つて呉れなければ、いつあなたの脇腹に短刀を御見舞申上るかわからない。」  
などいふ投書をぶつつけられて顔へあがつたのさへゐる。

その昔、今は某辯護士夫人の安藤文子などが金龍館でやつたやうに、水族館に通ひつめては舞臺の  
前面に頭張る野郎も現はれた。

が、それでも未だ物足りない連中は、どうかして樂家裏が覗きたい。

殊に夏などはスロースも三度位は取換へなければ、汗がベタベタしてやり切れないであらうなど、  
飛んでもない想像を逞しうして、樂家裏にはいつも二人か三人位は、怪しからぬ眼を光らせてゐる奴  
がゐる。

まことに、この樂家裏に對する興味といふものは、世界各國いづこも同じで、娛樂雜誌などでいろ  
んなことを書き立てるから、益々ファンの血を燃え立たせるのだ。

僕は震災直前、帝劇の樂家裏を覗いたことがあるが、名題の俳優が舞臺から汗だくたくで舞臺裏に  
歸つた時の騒ぎといふものは大變なものであつた。いつの間にもどうして入つて來るのか知らないが、  
黒縮緬の紋服や、紗の晴れ着を纏うた貴夫人たちが、ゾロ／＼と入つて來て、團扇で煽ぐ煽ぐ樂家へ  
送つて行くのである。この樂家裏でも、名流夫人たちの社交上の睡み合ひはかなり激しいものだとき  
いてゐるが、レヴュウの樂家裏は不良少年らしいのだけが集まる。

もし、夜の十二時すぎに水族館の裏に立ち止まつて見てゐる給へ。そこにはいつでも二三の人影が行

寝轉んでゐる。夏の夜はベンチのそちこちや、木の下蔭に無数の乞食がゴロついでゐる。

淺草を根じろにしてゐる乞食はその數五百人に達すと云はれてゐるが、女の乞食たるや極めて寥々たるもの。然し、いくら乞食と雖も食慾と性慾の羈絆からは脱することが出来ない。さればと云つて彼等はその性的衝動を癒すべき場所はどこにもないのだ。

彼等の中に交る女こそ實に蜜蜂の女王にも等しい。

然し、その女王にも等しい女の口から

「十錢ぢやいやだよ！」

といふ言葉が出るのだから、この際の五錢白銅が如何に絶大なる偉力をもつてゐることか。

笑へない喜劇である。

夜の十一時すぎると、乞食ではないけれど、貞操の押賣りをする女が物の怪のやうに三々伍々と現はれる。

彼女たちが捕へたムク鳥は何處へ連れて行かれる？

木の蔭や、薄暗いベンチ、共同便所、それが彼女たちの本部屋なのだ。

悲しい動機ではないか？

安いから大衆的だ。大衆的だから安いといふ因果關係は通り越してゐる。

### レヴユウの樂屋裏覗き

カジノ・フォーリーが淺草に旗あけてからといふもの、一時淺草はレヴユウでなければ、夜も日もあけぬありさまとなつた。

エロチシズムに渴き切つてゐた大衆の意氣にピタリと投合したのであらう！

クララ・ボウなどがスクリーンの上で、旺んにあの挑發的な尻を振廻すものだから、映畫ではどうも物足りなさを感じてゐた連中には渡りに舟の好機會であつた。

若々しいやつと成熟しかけた女たちが、靴下もはかずに滑らかな脚を丸出しにして放ね廻るのだから、誰が見たつて氣持の悪からう筈はない。

尤も靴下をはかないのはすぐ破れてもつたないといふ経済的理由が主なのだが——  
續いてオペラの古強者河合澄子が乗り出し、前から膝立てだけして機会を狙つてゐた松竹興業會社  
が大袈裟に旗あげしてレヴュウの意氣はいよ／＼あがつた。

映画館では「スター連中がフアシの皆様にお目にかゝりたいと云ひますから」と出鱈目な理屈をこ  
ね廻して、幕合に唄を歌はせたり、踊りをやらせなければ客脚が減るといふ素晴らしいさである。  
スターこそいゝ面の皮だ。

浅草の水族館の踊り子などは

「今夜會つて呉れなければ、いつあなたの脇腹に短刀を御見舞申上るかわからない。」  
などいふ投書をぶつつけられて顔へあがつたのさへある。

その昔、今は某辯護士夫人の安藤文子などが金龍館でやつたやうに、水族館に通ひつめては舞臺の  
前面に頭張る野郎も現はれた。

が、それでも未だ物足りない連中は、どうかして樂家裏が覗きたい。

殊に夏などはズロースも三度位は取換へなければ、汗がベタベタしてやり切れないであらうなど、  
飛んでもない想像を逞しうして、樂家裏にはいつも二人か三人位は、怪しからぬ眼を光らせてゐる奴  
がゐる。

まことにこの樂家裏に對する興味といふものは、世界各國いづこも同じで、娛樂雜誌などでいろ  
んなことを書き立てるから、益々フアンを燃え立たせるのだ。

僕は震災直前、帝劇の樂家裏を覗いたことがあるが、名題の俳優が舞臺から汗だくたくで舞臺裏に  
歸つた時の騒ぎといふものは大變なものであつた。いつの間はどうして入つて来るのか知らないが、  
黒縮緬の紋服や、紗の晴れ着を纏うた貴夫人たちが、ゾロ／＼と入つて来て、團扇で煽ぐ煽ぐ樂家へ  
透つて行くのである。この樂家裏でも、名流夫人たちの社交上の睡み合ひはかなり激しいものだとき  
いてゐるが、レヴュウの樂家裏は不良少年らしいのだけが集まる。

もし、夜の十二時すぎに水族館の裏に立ち止まつて見てゐる給へ。そこにはいつでも二三の人影が行

つたり来たりのするのを發見するであらう。  
また裏口のトタン塀の脇に一寸とした空地があるが、そこでも三人や四人の人影は必ずうごめいてゐる。

劇場がはねてから、未だ舞臺稽古をしてゐる女の歸りを待ちわびてゐるのだ。  
然しこれをバリのミュージック・ホールの踊り子たちに比べると、日本などはまだまだ問題にならない。踊り子の聲名もそれほどでもなし、彼女等を誘惑しやうとする魔手も、ほんの不良徒輩の一部分だ。

そのいゝ悪いはこれは又別個の問題である。

### 吉原夜話

大江戸時代には、女の髪かたち、衣裳などはすべて吉原の癖が流行の魁をなしたものだ。堀越勝山の勝山齋が、一世を風靡した丸髻の元祖である位は誰も知つてゐやう。

今でこそ娼妓だ、女郎だと奴隷視されてはゐるが、同じ川竹の勤めの身でも、江戸時代の花魁には意氣と氣概と、若干の自由が許されてゐた。

奥州仙臺若殿様に

なぜに高尾は惚れなんだ

たとへて對手が大名でも、自分の氣にむかなければ

「わちきはいやでありんす」

と突放ねることさへ出来たといふ。

土手八丁を籠で飛ばせて、夜毎夜毎に通ひ詰める旗本武士や、田舎侍を鼻先であしらつた江戸時代の花魁は、今の娼妓に比べると何といふ果報者であつたらう。

廓近くの衣紋坂から見返り柳に至るまでの一丁近い往來が、深編笠に黒羽二重の武士や、助六もどきの町奴、さては氣骨と俠氣を誇る見て呉れがしの丹前姿、それらの人々で埋つてゐた吉原時代——  
そうした景色 只浮世給でみる外にすべはない。

夕べ夕べに

身に淺草の

露をふみわけあの吉原に

しどろもどろと

君ゆえ迎る

.....

昔の唄にもある通り、まことの戀の花さへ咲いた、あの懐しい吉原の面影はどこに消えたらう！

振袖姿に鈴入りの木履、主へ使ひの可愛い禿かぶつの覺つかない足どりさへ、今の僕たちには只一片の空想に過ぎないのだ。

なべてかうした所の女といふものは、ほの暗い行燈の銀燭に透してみた方が遙かに綺麗で、そこにも得も云はれぬ媚なな風情が浮ぶのである。

べた塗りの化粧化粧を、輝かしい電燈に晒した容貌は、どう最良目にもみても餘り芳ばしいものでは

ない。

それでもまだ張店の格子先に、すらりと並んだ頃の娼妓には魅力があつた。

「ねえ、後生だから遊んでつて頂戴よう！」

と、煙管の雁首で着物の裾をグルグル巻にされるのが嬉しさに、一度の思ひが二度となり、ついフ  
ラ／＼と出かけることが多かつた。

それがいつの頃よりか張店廢止の寫眞となり、等級別の切符制度になつてからといふもの、彼女たちに対する遊客の感じは、遂にガラリと一變して淫宵婦同様になつたのである。遊びや靡情緒の氣分を味はふ心が遠ざかつて、せり上げて來る本能慾を満足さすための對象物にすぎなくなつた。

圓タクを飛ばせて忙しさに飛んで行き、目的を果すとサッサと歸つて來る味氣なさだ。

これは客の質が悪くなつたのか、それとも切符制度などが客の質を悪くさせたのか、そのうちのどちらかである。

女に接する機會に乏しいものや、少しの金で女の肉の香を嗅がうとするものには結構な制度だ。

それに今日では遊廓で大盡遊びをする蕩兒は殆んどなくなつたと云つていふ。

たいていは、廓近くの安バーや、小料理店などで酔拂つて了ふ。だから山谷の停留場で降りて、あの廣通りのカプエーを覗いてみると、これから吉原に繰り込まうとする人間でどこもかしこも大入満員だ。

なにしろ、割部屋の揚代を拂つて、女郎のお茶引きを狙つてゐるやうな客が増えたのだから、世知辛い世の中である。

あつちの馬鹿々々しくもいふ天氣

かうした粹なお客など樂にしたくもないらしい。

これがまだ大正七八年の景氣のいふ時代や、明治時代には可なり思ひ切つた大盡遊びをする人も月に二回や三回はあつたといふ。

政治家でも、實業家でも、その頃は待合同様に廓に出入したものだ。が、廓の格が下つてからといふもの、たまに大盡遊びをする者は凶狀持か、相場師位のものである。それとても、昔風に引手茶屋か

ら正式に交渉するものは殆んど數へるほどしかゐない。

頭山滿翁が時の總理大臣松方侯に

「松方さん、若いものが遊びたいといふから、ほんの小使だけでよろしいから百萬圓ほど下さい。」と云つて、その十分の一もらつた十萬圓を、ボンと乾分に投げ出して、

「さあ、これだけでもつて吉原で遊んで来い。」

といつたといふ話は有名なものだが、土地の古い人など、昔のあれこれと語り合つては、今の不景氣時代を罵つてゐる。

然し、それでゐて、自分たちの缺點の多いことには氣がつかない。

第一、妓夫太郎の誘惑ぶりからして、こちらの享樂氣分をぶち壊して了ふのである。揉手をし乍ら近寄つて来て、馴々しさうにボンと素見客の肩を叩き

「ねえ、旦那、今夜はとでもひまで、おいらんはみんな遊んでゐます。お泊りがいやでしたらほんの一時間だけでも結構です。料金はすつとお安くしまして御覽の通り一等が……」



これを聴くとたいていうんざりするばかりでなしに、寫眞の可愛い目つきが本物は鋭眼みであつたり、高いスマートな鼻がベシヤンコの團子鼻であつたりするのだ。

それどころか、

「さあ、どうぞお上りなすつておくんさい。お約束は一兩二分かつきり、それ以上は鑓一文だつて頂戴いたじやせん。なにしろこの通りの不景氣でござんすから、騙されたと思つてどうぞ」

と、疊みかけられ、さて登樓つてみると、やれ遊興稅だ、花稅だ、「どうかもう一圓だけ奮發してやつて下さい！」とけしかけられ、不景氣どころの騒ぎか、見るに絶えない恰好をして、娼妓が出て來るといふ醜態だ。胸糞が悪くなつて、薄ぎたない蒲團を引破りたい氣持にさへなる。

又、始めての家へ金のありさう顔でもして上つて見給へ！

引付の座敷へ通るや否や

「あらまあ、しばらく」

と、やけて婆さんは酒々としてしらを切るのである。

「冗談云つちやいけないよ。憚りながらこんなところへ來るの始めてだよ。」

「へへへ……なんのかんのつてネ。さあ、お冗談は止しにして、誰をお呼びませう！」

「なに、誰だつて構はないよ、杵子なりと臼子なりと、團子でもお多福でもなんだつていゝんだ。」

番頭が不景氣だ不景氣だつていふから、お茶つ引女郎の本部屋の番人になるさ。」

「おやおや、たいさうお口の悪いこと。」

と、やりて婆一流の首振りだ。それも縦に振る。

いよく、あいがたの娼妓が來ると、

「召し上りものはビール、それともお酒、お肴はなににませう。おさしみに酢のもの位であつさりしたところではどう？でなければ洋食でも。」

こんな時、大きく頷きでもしやうものなら、番頭に親子井、それから下足番に、それから……と散々しほられて、おまけに水菓子位ペロリと平けられることを豫め覺悟してをかねばならぬ。

そして、その揚句、女の寝物語りなるものが、

「どうせ羨しなど、こんな所にゐてタサくしたつて始まらないのだから、誰が何と云つたつて早く自由な身になりたいわ。色だの戀だのつてバカ臭いこと云つてた日にあ、五年のつとめが七年になり、七年が十年になるんだから……」

と自棄くそ半分のぐちを聴かされる。

麻遊びのつまらないのはこれ位にしてをくが、振られた客の野暮な告口ではない。

昔と今の比較をしたにすぎないのだ。

然し、今日でも忘れがたいのは、櫻咲く頃の吉原の夜長だ。

仲ノ町の樓並木には、昔忘れぬ雪燈が燈され、引手茶屋といふ引手茶屋はそれぞれ暖簾を張つて表を飾り、二階の欄干から長い振袖を垂れて、ちつと往來の人々を見送る雛妓の姿もしほらしい。

又、かうした春の臘夜に、裏通りの小さな青樓に登樓しないで、稻本樓、大文字樓、角濤老樓などいふやうな大店に登樓し、色氣ぬきに悠くり落着いて遊べば、何となく江戸時代の面影がまだいくらか残つてゐるやうな氣がする。

格式はやはり格式で、高い代りに意地ぎたなくない。おかしな茶細にガタ／＼簞笥だけの二三流の本部屋とは、内部の設備も雪泥の相違だ。夜具だつて上から下まで縮緬すくめ、六枚折の屏風を立て廻した中で、悠然とふんどり返つてみないと、吉原の味がわからない。厚くて軽い蒲團に深々と體を埋めて、合方の微かな寢息を窺ひながら、悲哀な音を帯びた新内流しを聴くのは、いかにもしんみりしたい、氣持である。

枕元に並べられた酔ざめの水差と煙草盆も、芝居の小道具に使ふやうな立派なものだ。

澄みきつた水でグツと咽喉をうるほす。

その時、女がニツコリ笑つて艶つほい眼差を向けながら、靜かになよなよした腕を差しのばせば、それで廓の享樂は百パーセントの興味があるものとしなければならぬ。





新宿三越裏カフェー街夜景

伸び行く新宿  
 燈の殿堂武蔵野館  
 エロの集窟  
 彼等のためのホテル  
 素脚を客に投げつけて  
 舞ビズ  
 奉仕と罰金  
 カフエー職術  
 女給の射落し法  
 寂れ行く神楽坂  
 神楽坂の藝妓  
 名物おでん  
 牛込の小町娘  
 戀をホートに乗せて

三越の山手

### 伸び行く新宿

昔は宿場女郎のゐる所として以外に、あまり重きを置かれなかつた新宿が、今や帝都の一大歓楽郷として、ダンゼン銀座と對抗するといふ物凄さだ。

エロの新宿、グロの新宿、その氣品は兎も角として、あの油ぎつた年増美人のやうな感じのする新宿の街は、さてこの後どこまでエロの翼をひろげて行くつもりだらう。

想へば、あの涙ぐましい震災の悲劇は、ミス新宿にとつては悪好のパトロンであつた。

新宿をあれだけ美しくし、新宿をあれだけ魅力あるものにしたのは、地下の餘の悪戯である。さう云へば、新宿の街も亦餘のやうにグロテスクな感じがするではないか。

先づ新宿の頭ともいふべき驛の説明から始めると、山手環状線と中央線の分岐點、それに小田急のホームと汽車のホームを加へて都合六つのホームがある。

そしてこのホームの下にある一丁餘の地下道がこれ又なかく大變な入。人の通らない時間は午前

二時頃から五時前までのほんの二三時間で、早朝と夜更け以外は實に芋を洗ふやうな雑踏である。無限にひろがる武蔵野の新興地帯から、新宿へ、新宿へと押かける人の数は一日平均どの位あるかは知らぬが、新宿驛の乗降客は日によつて二十萬を突破する。

試みにあの地下道入口の階段の上に、ものゝ一分間も立つてみると、いや實にいろいろな人間の千種萬態の姿が見られるのである。太つた女、痩せた女、美しいマダム、おはねのモガ、金ピカの軍人に裨天の勞働者、酔つ拂ひに夫婦連、女學生にセイラーパンツ、それ等の夥しい人々がそれぞれ前の人の尻を追つてるやうに見える。

更に階段の側にある掲示板へ眼を移すと、

「Kさま、正午まで待つてゐましたが遂に御見えになりません。妾し歸りますわ。S子」

などいふセンチメンタルなのがあるかと思ふと、その隣りには

「Tよ、突然の急用で今日一緒に行けない。明朝十時までにもう一度例の所で待つてゐて欲しい。

G生」

「H子に告ぐ。僕は一足先に約束の場所に行つて待つてゐる。」

實際、この掲示板はいつ見ても、その半數は嬉鬼する者同志の打合せだ。

待合室を覗くと、苛々しい面持をした男や女が、人が入つて行つたばかりと入口の方を注視してそれが豫想者でないと又がくりと首を折つて眼を落す。

郊外へ逃げて行く密會者たちには、新宿ほど便利な驛は外にはない。

大膽な女などは、こゝへいゝろんないたづら書をして、側に隠つてゐる多くの男子をわざと羨ましがらせる變り者さへゐるとのこと。

さて、驛前の廣場へ出ると、バスと、電車と自動車とでぎつしりと埋つてゐる。

驛の方から進んで右側の角が東京バンの出張所、その少し先が有名な中村屋のロシアバン。年俸一萬圓のロシア人の技師を雇つてゐるだけあつて、バンの賣上だけが一日八百圓から千圓を越えるといふ物凄さである。

この主人相馬氏は外國の亡命家を世話することでも有名であり、印度の志士、支那の革命家、日本

のプロレタリア闘士などもかなり面倒を見てもらったものだ。

驛の真向ひにあつた新宿の三越分店はこれを二幸商店に譲つて、今度新たに八層樓の新ルネサンス式大建築を完成した。賣場は地下の二階と地上八階、ほていや、松屋支店などを見下して大三越の猛威を奮つてゐる。

三越と並んで高級映畫とレヴュウの殿堂帝都座は、現在さかんに竣工を急ぎつゝあるから、これ又一九三一年度に於て素晴らしい活躍を見せて呉れるだらう。

三越の角を曲つて少し入ると新宿ホテル、ホテルと向ひ合つて、帝都隨一の覇を握る武藏野館がある。その名は徳川夢聲の名と共に四隣を壓し、外國優秀映畫の封切場として紳士淑女が殺判する。

まことにその堂々たる構へは、單にプロ階級を威壓するだけでなしに、内部の雰圍氣に至つては宛然戀の殿堂である。

武藏野館で映畫を見るといふことは、そこが封切場であるといふ先走つた考へよりも、寧ろ一種の誇りを覺えるために行くのである。腕を組んだ外人や、良家の令嬢や、不良マダム、トッチャン

ボーイ、モダン・ガール、モダン・ボーイ。さうした人々の間にまぢつて、さも映畫通らしい意見を吐き散らしてゐる氣障な青年男女の如何に多いことよ！従つてこゝに出入するファンは、日本物を貶すことによつて自分の偉さを示し、日活や松竹の俳優並に監督たちが、如何に低能でやくざであるかといふやうなことを云つてゐればいゝのだ。

スクリーンに甘い接吻の場面が映れば、良家の婦女子たちはその戀人と同じやうなシーンを想像して胸踊らせ、中には人知れずそつと手を握り合つて感激の陶酔に浸つてゐる者もある。

女を昂奮させるにはよき映畫を見せること、女に戀心を湧發させるには甘い戀物語の映畫を見せるに勝るものはない。

殊に映畫を見る戀人同志の喜びは、何よりも先づ場内の暗さである。この暗さの中で彼等は戀の表情、戀する者の心理、戀する者の態度を目前に學び取りつゝ心を踊らすのだ。新しい女が芝居よりも映畫を好む理由がそこにある。あられもない嬌態な場面でも、顔を赭くするどころかパツチリ眼を開いてみる事が出来るし、そつと手を握り合つても誰も自分たちの舉動に氣付くものはない。

富豪や貴族の娘たちが、比較的世間といふものに没交渉であり乍ら、戀といふものゝ表情に至つて並々なぬ手腕を有するのは、一つはこの暗さの中から學んだ戀愛術のお蔭である。

現代の新しい男女が、グレッタ・ガルボを知らなかつたり、ラモン・ナヴァプロを飲料水と感嘆ひしたりするやうでは、最早現代人としての資格はない。

もしそれを知らない女などには決して戀を囁くべからずである。そんな女に戀でも囁かうものなら彼女はきつと次のやうに答へるであらう。

「でも、でも、妾は母さまのいふとほりにしますわ。」とね。

武蔵野館は、吵くともさういふ女を一人でも此の地上から葬るために絶大な偉力を持つのである。

料金が高くとも、トーカーの發音が聴きとれなくとも、分らない英語を分つてるやうな顔をして、兎に角いかに多くの若い男女が押かけることか？

静かな胸を掻きまぜるために、掻き亂された胸を静めるために、艶めかしい脂粉の薫りはいつもこの館に充ち溢ふれてゐる。

武蔵野館で熱い血が湧き立つたが、さてたつた獨りで映畫を見て來たのでは如何しやうもない。さうした人々のためにすぐそのさきにエロの新宿街が展開する。

誰に遠慮も要らないから、この食堂新道の路次といふ路次を片つ端から覗いて見給へ。

なんといふ夥しいカフェーやバーであらう。少しボンヤリしてゐた人には、いっとうしてこんなに澤山のカフェーとバーが出來たか御存知あるまい。

震災當時まではこの附近一帯には、うす汚い倉庫や、小さな駄菓子屋などしかなかつたものが、大正の終りから昭和の初頭にかけて次第に今日の草分をやつてゐた。

それが今ではどんな小ほけな店を出すにも、五千六千といふ高價な權利金を出さなくては始められない。

これといふのも、新宿そのものゝ偉大な發展即ち新歌舞伎座とか、三越とか、郊外電車などいふものが次第に多くの客脚を吸集し始めたからに外ならない。

人の集まる所には食ひ物がなければならぬ。食ひ物と酒がつきものなら、酒と女も亦不即不離の代



物である。

女がゐれば男が寄りつくのは、水が高い所から低い所に流れるのと同じやうに分りきつたことだ。女と男とが寄りつけば戀の花が咲き、戀の花が咲けば……え、つ面倒臭いっ！

構へは小さいけれど、立ち並ぶカフェー・バーの趣好はいづれも近代的な裝飾を施して、エロを賣り物にしてゐる點では銀座にまけぬ。

いや、銀座以上にエロ味たっぷりでなければ設備の點から云つても對抗出来ぬ。

そこに新宿の強味があり、この強味があればこそ我も我もとモボやモチが押かける。

夕暮れ近くなると女給が入口に彳すんで、道行く人にそれとなきウインクもすれば、馴染客が通れば袖を捕へて放さない。あたりの空氣は魔窟めいた妖氣を孕んで、銀座の明るさに比べると遙かに暗い。

先づ新歌舞伎座横通りの電車道から入つて行くと、二三年前から旺んに宣傳してゐるカフェー。ミハトがある。銀座に比較すると問題にならないが、この附近ではいちばんガッチリした店であらう。

その先の路次を左に折れて、ユニオン、キリン、ジャボン。それから一時新宿のエロを一人で背負つてゐたやうなスポーツなどがある。その向ひ側にはダイヤだとか、チロルだとか、その他いろんなのがある。

この通りを午前十一時前に通ると、夜はまるで女王の様にすましこんでゐる女給さんたちが、尻端折つて、眞白いふくらはぎをチラつかせ乍ら、椅子を拭いたり、土間を洗つたり、灰吹皿を磨いたりしてゐる。

だから、カフェーで大いにもてやうとする人は、正午前にカフェー街を散歩するやうな野暮な眞似はお止しになつた方がいゝ。

どの家といふことを名差すのは、問題でも起すところさからこの際遠慮するが、とに角この一席内のあるカフェーでは、一時五圓均一といふのがあつた。

節約のつもりで、ホンの銚子一本にカッの一皿位で切上げて、いざ勘定となるとチャンと五圓請求されるのである。

ビールは四五本もあほつて、料理の二三品はつても矢張り五圓。始めての人間はたいてい一通り飛んでもない馬鹿を見てゐるのだが、高い代りにチャンと女が一人あてがはれてゐたのを知らなかつたのである。

「どう、お二階へゐらつしやらない？」

階下で飲んでゐると、側についてゐる女は必ずかう云つて客を誘ふ。

二階で腰を落着けて飲んだのでは、一定額を超過する不安と、勢ひチップもよけい奮發しなければならぬといふしみつたれた根性から、

「いやなに、こゝで結構だよ！」

と、たいがいの男は馬鹿々々しくも据膳を辭退して、ふんだくられた五圓に眼を丸くした。かうした場所では矢張りいけ圖々しいのと、大膽な男が勝利を占める。

「どうお二階へ？」

「うむ二階は空いてるかい？ちやあ二階へ行かう。」

と、威勢よく上りこんだ男には果してどんな徳があつたか？

然し、二階へ上つたからといふて、冗談口一つ利けないやうな者は、矢張り据膳の御馳走にはありつけなかつた。

「姉さんはなかくいゝ肌をしてゐるネ。どうだおい、まるでシャブリつきたいやうな肉をしてゐるネ。」

とか何とか云つて巫山戯かゝる位の度胸が必要である。

「まあ、あなたは猛烈ネ。」

かう云はれて、そのまゝテレ込んで了ふやうでは、この家では落第生であつた。

「さうだよ。俺に逆も猛烈なんだ。君だつてさう嫌ひなやうな顔附でもないぜ。物は相談だが、どうだおい、何とか恰好つかないか。」

と、醉眼音無しの橋へで切りこんで行く。

すると女の云ふことじ。

「あら、なかなかお達者ねえ。」

と云つてチクリと客の手か脚を掴つて、

「これだけはないしよよ。」

とひそびそと耳打したものだ。

つまり積極的には働きかけないが、打てば響くの法則によつて、飲んでも飲まなくても五圓、誘ひかければ、落花流水といつたところに均一制の根拠があつた。

あとでそれを知つた連中、くやしがるまいことか、地團太踏んで再び出かけた頃には、そのうちではひどいお灸を据えられて、均一制度を徹底してゐた。

つまり一度でコリた人間も多い代りに、一度で新宿の正體を知つたといふ者もあるわけ、これが素嗜しい評判になつて、新宿へ、新宿へと志した人間は決して少い數ではない。

現在では何等のこともなげに營業してゐるが、この女は今でも二三回遊びに行けば、こちらから打たなくても響くとのことである。

勿論、その家でものにしやうなんて、それはチトむづかしい。

時間と日さへきまつてゐれば、その附近には便利なホテルがいくらかもある。

例へば、新宿ホテルである。三階建て、部屋の數が約八十。各階に浴場があつて、十二時すぎた眞夜中でも入浴が出来る。

眞夜中に誰が入浴しやうと、それは入浴する人の勝手に、宿屋の知つたことではない。たとへて對手が男女の二人連であらうと、泊めて呉れと云へばお泊めするのがホテルの商賣である。泊りこんだ客が怪しいからと云つても、それまで調べる權利はホテルにない。

一人室が二圓から六圓、二人室が三圓から六圓の部屋代と、茶代を取らない代りに、費用全額の一割をサービス料として頂戴すればホテルの方ではそれでいゝのだ。

新宿の女給がホテルに泊るか泊らないか、そんなことまでは僕が如何に閑人だからとて調べてゐない。

又あるカフェーではこんな女がある。

僕なら僕がいくら酒に酔つたとする。女と二人でボックスの隅つ子に陣取り、僕も呑んだり、彼女にも呑ませたりといふ、甚だデカタニツクな場面である。

女はスカート一重の丸々しい脚を、いとも御丁寧に僕の膝に乗せてくれる。

室内には豆ランプに等しい電気スタンドがそちこちに光つてゐるだけで、彼女の脚がどんなになつてゐるか先方のお客さまには見える筈もない。先方のお客さまとて側にはチャンとモガの女給が喰附いてゐて、他人の席を顧みるやうな暇はないのである。

脚をつけた女が

「どう、酔拂つていゝ氣持でせう。妾しにも酔はせて頂戴ネ。妾しお酒いくらでも呑めるわよ。」  
酔拂はなくてもいゝ氣持である。

「あなたは見かけよりも肥つてゐるネ。ほら、妾しもよく肥つてゐるでせう。こゝんところを押へて御覽。ほら、あなたのよりすつと柔かいでせう。どうして女の體が男のより柔かいかあなた知つてゐる？」

「止せやい、氣持が悪いぢやないか。」

「あたしがかうすれば氣持が悪くつて？嘘でせう。氣持が悪いのぢやなくて惱ましいのでせう。」

「已惚れぢやいけないよ。そんなことで惱ましかつたら、東京の街は眼を開けては歩けないよ。」

「あらガツチリしてゐるわねえ。頼母しいわ。嘘かほんとか試してみるわ。かまわないでせう？」  
と、甚だ怪しからぬ振舞にも及びさうな形勢！

「もう分つたよ！參つたから勘辨してくれないか？」

「え、勘辨したけるわ。その代り罰金一圓頂戴ネ！」

驚き入つた罰金である。

従來、チップと云へば奉仕に對する心づけであつた。然るに、今やチップなるものはサービスに對する要求と化しつゝある。

奉仕が金と交換條件になつて、キッスなども愛の表示から、取引關係にまで及ばんとしてゐる。遠からず場所に依つて價格に相違があるキッス直段表などが出来るかも知れない。

既に指先が十銭、顔が二十銭、唇が五十銭といふ女があつたと聴くが、かうした出鱈目な與太が現實問題となる日も遠くはあるまい。

さて、新歌舞伎座裏のカフェー街はその程度にして、今度は新宿二丁目の遊廓附近だ。第一銀行支店の角を折れて細い路をかきわけて行くと、こゝにもエロエロカフェーやバーの集窟がある。

こゝは前の場所よりもつと氣品が落るが、近代性と日本趣味とをチャンボンにしたやうな感じがあつて、エロの程度はもつと濃厚である。流石に廓近くと云つた氣分が漂ふて、中華樓、カフェー・ヴォルガ、××軒と云つた工合に、名前だけは國際的に塊まり合つてゐる。

女給はたいて五、六人、服装は同じ新宿でも見すほらしい。

廓通ひの客ばかりを對手にするので、猥談でも猥歌でも洒々としてカツ飛ばす。

總體に新宿の女給はよく喋舌りよく唄ふ。だから、たとへば、

知らず知らずに泣けて来るのよう

ねえ、ねえ、愛して頂戴ねえ

と、あの尻擦ぐつたいやうな俗歌、唄つても、それが新宿の女給である場合は妙に色つほくて不自然な感じがしない。

氣がムシヤクシヤしていやに惱ましいやうな晩は、銀座などの大きな店で自來酒を煽るよりも、あのゴミゴミした新宿のバーが遙かに柔かい氣持を呼び起さして呉れる。

次はカフェーでの遊び方であるが、カフェーとかバーなんてものは、實に莫迦々々しくて、くだらなくて、一向に遊び甲斐がないといふ人が可なり多い。

といふのは、只單に女給の酌をしてもらつて、女給の唄を聴いて、そして酔拂つて歸るだけでは如何にも呆氣ないといふ點にだいたい意見が一致してゐる。

つまり、もつと煎じ詰めて云へば、彼女たちの最後の提供物を把握しなければ物足りないといふ意味になるのであらう。

かうなつて来ると問題は勢ひ女給との戀愛關係に及んで来る。

又、女給にしては来る客、来る客に一々戀をしてゐてはやり切れぬ。殊に新宿の女給は獨身者ならざる女給が極めて多く、夜の一時すぎた頃それぞれ圓タクを飛ばして彼女の愛する情夫の許へ歸る女が多い。

だから、新宿附近で夜の一時二時に圓タクを飛ばしてゐる女を見たら、その九割までは女給と見做して差支へない。

更に獨身者の女給に至つては、多くの場合コックなり、店の主人などが手をつける場合が極めて多いのである。

女給にしてコックの要求を斷乎として拒絶せんか、そのしつべい返しは直ちに次のやうな形態となつて現はれる。

「チキ一丁」と女給が板場に通す。

勿論、室内には客が混雜して次から次へいろんな料理の注文がある。

さういふ機會を狙つてゐるコックの方では、拒絶された女に對してはワザと品物を遅らせたり、チ

キと云つたのにカッを作つたりして突出するのである。

「あらいやよ。チキと云つたぢやないの」

「なに云つてやあがるんだい。カッつてさう云つたぢやあないか。」

かうした實例は屢々あることで、コックに睨まれた女給が、どんなにつらい思ひをしなければならぬかは、その道の經驗ある人でなくては一寸想像出来ない。

つまり、四方八方から誘惑せめになつてゐるのだから、これを射落さうたつて、さう牛優しい仕事ではないのである。

ところが、世の中にはいろんな才人がゐるやうに、カフェーの女給をコロコロと射落して、結構相當な小使をせしめてゐる人間がゐる。而も、たいてい金を使ふでもなく、絶世の美男といふわけでもない。

餘り名譽にもならないが、僕の友人Aなどもまさしくそのうちの一人であらう。

彼は女が見惚れるやうな美男子でもなく、金には年中困つてゐる。けれども、洋服の場合はいつも

ズボンの折目を正しく、和服なら濛い柄に肌着をつけなくて、いつもスッキリした恰好をしてゐる。Aがもし始めてのカフェーに行くとする。その場合、彼は必ずお客が殆んどゐない時間を選ぶか、お客の少ない店を選ぶかする。

多勢の女給は隅つこに集まつて、鴉の目鷹の目で來客を待つてゐる。

彼が入るとみんなの視線が一齊に彼の體に集注される。

彼も亦わざと皆の眼が注がれる中央の椅子に腰を下す。

而も端然と行儀正しくして、決して天井を見たり、スタンドの方を見たりしない。況んや女給など眼中にないと云つた顔付で石の如くすましてゐるのである。

女が自分の姿を石の如く黙殺されることは、藝術家がその作品を黙殺された以上に口惜しいことではない。なければならぬ。

一人の女給が近づいて來る。

「お召上りものは。」

この場合でも尙ほ彼は先刻からの態度を少しも翻さうとしないで、依然として俯向いたまふ

「コー茶」とたつた一言ハッキリ答へて、決して女給の顔など見やうとしない。

さて、かうなると番にあたつた女給よりも、端で見てゐた女給が面喰つて了ふ。

「あの恰好で、あの身なりで、それでたつたコー茶一杯」

紅茶が來るまで彼は僕から新聞を出して先づ經濟欄を見る。

紅茶が運ばれると、新聞を見ながらコップを取つて徐ろにそれをすゝり、飲み終るとメニューを覗き、ちやんと十五錢をいて、又もや女給など眼中にないと云つた顔付で悠々と退場するのである。

さて、その次に行つた時、女給たちは果してどんな顔をするだらう。

もしその時、番にあたつた女給が非常に醜い女であつた場合、彼はコー茶一杯のんでもちやんと一圓のチップを奮發するのである。

もちろん、暇な時間を選んで、多ぜいの女給が見てゐる所でそれを實行する。

顔に自信のある女給はこゝに於て再び阿然として、彼といふ人間に人一倍の注目を拂ふ。かくて、

彼は自分の狙つてゐる女に對し着々と暗目のデモストレーションを試みてゐることが、第三者の女給たちには分る筈でない。而して彼は依然としてその次に行つた場合でも、この醜い女に特別の好意を示すやうな恰好をしてゐるのだ。さうしてをいて、彼がほんとに好きになれさうな女を苛々させ、たとへ冗談にしろ、彼女を罵倒めいたことを一言でも發するやうになるまでその忍苦が持續される。果していつかの機會に於て、美しい女給は彼をからかふのである。

醜い女となら喜々として楽しげにふざけ散らす彼は、その時に至つて始めてその地金を出し、この地金たるや又極めて謙遜なしほらしいもので、

「僕なんか美人に惚れる資格はないからネ」と軽く一蹴するやうな態度を示す。

この一言は、その女給をしていやが上にも喜ばせる。同じ美人だと賞められるにしても、この時の美人といふ一言は、單なるお世辭や冗談でなくて、その表現が實に生々とした眞實性をもつてゐるからだ。

それまで傷つけられてゐた誇りを一時に奪ひ返したその女は必ずや

「あら、そんなことないわ!」

と言はざるを得なくなるのである。

誰がやつてもうまくゆくかゆかないかは保證の限りではないが、Aといふ男は實にかうした戦術をいろいろに應用して次から次へと女を陥落させたことだけは事實である。

カフェーで金を使ふのがもつたいたいといふ人には、多少の參考にもならう。

同じ新宿二丁目にある廓（かや）に就てはあまり多くを語る必要もあるまい。

新しい感じを出すためか、こゝは吉原や洲崎あたりのやうに、何々樓と大きな看板を出すことを止めて、軒頭に鈴岡だとか、歳勢州とかいふ工合に待合氣分の家が多くなつた。かと思ふとHORAI ROとローマ字の電飾を施した洒落たのもある。

春の吉原のクラシクな情緒もなければ、波の音が靜かに聴えてくる洲崎の夜の特種な叫情もない。それかあらぬか、氣樂に輕快に遊ばせやうといふので、八幡樓、倉山などは超モダン、娼妓のダン



スといふのをやり始めた。

妓夫太郎が洋服に赤いネクタイをつけて、客引をやるのも乙なものだが、入場料九圓、三圓、二圓の切符を求めて娼妓と踊るのもシャレてゐる。五圓と三圓が泊り、二圓がシヨートタイム、つまりチヤブ屋式妓樓になつたわけで、なるほどこゝでなら幾ら踊り草疲れても草疲れ甲斐があるわけだ。

「妾し疲れちやつたわ、もう休みませうよ。」

「ボクもくたびれた、ぢやあさうしよう。」

てな工合で、意氣陽々と誰に遠慮も要らずに楽しいホームに行くことが出来る。

實にうまいことを考へたものだ。

鳶鼠かへつて猫を噛む。いや人間はみなそれ相當に生きて行く道を考へるものだけ。

### 寂びれ行く神樂坂

神樂坂と云へば、新宿が今日の地位を得るまではダンゼン山之手第一の繁華な街であつた。あの急

な坂道を挟んで、新舊とりどりの老舗がいかにも和洋折衷といふ感を抱かしめる。夜になると自動車の通行も止められ、老人も子供も安心して散策する。

坂を上り切ると毘沙門天があり、その後ろ側には神樂坂の落着いた花街の灯が流れてゐる。

この土地は昔から多くの文士と因縁淺からぬものあつて、尾崎紅葉以來、實にいろんな作家が艶聞を流したので有名である。

それに、晝でも夜でも艶つほい藝妓の姿が眼にとまり、壽司屋へ入つてゐる藝妓、シューマイを買つて歸る半玉、半衿の柄を品定めしてゐる年増——さう云つた工合に、喰ひしんほうと、出歩きしたがる藝妓の多いことだけは一見してその内幕が見透かされる。

だから藝妓と稱するものうちにも、すゝぶんいかはしいのがあつて

「なにかお前の得意なもの一つやれよ。」と云へば

「妾し何も出来ないわよ！色氣だけの御目見得よ！」

などと洒々として澄してゐる。

それがあらぬか、晝間湯歸りの妓など、顔色は何となく蒼味を帯びて、芳ばしからぬ病狀持と見なされる向の多いのも情けない。

おまけに、多くの待合が他所に比べていやに勘定高いといふ悪評などもあつて、蕩見らしい蕩見はこの街の空氣はいやだといふ。

然し、待合側に云はせれば、勘定のことをキチキチ催足する代りに、ほか様よりずつと勉強してゐるといふのである。

金解禁以來、この街にも不景氣風は風速二十メートル以上に吹きまくつて、お銚子二本、料理四品藝妓付五圓などと、例の特遊とかいふ奴を新聞の案内欄などに廣告して器量を下げたが、特遊七圓萬事解決などいふ變挺な廣告を出してお灸を据えられたのがあつて以來、流石に氣恥しくなつたものか止めてしまつた。それでも、郊外の藝妓みたくに、カフェーやソバ屋にまで行かないのがせめてもの取柄である。

薄ぎたないカフェーに出張して、陳腐な恰好の女給と一緒に

「スツチヨイ、スツチヨイ、スツチヨイナ」

と手を叩いてゐるのを見ると、そつろに物の哀れを催してくる。

人通りの多い割に昨今の神樂坂は濶濶たる色彩がない。洋食と果物では山手随一と折紙をつけられてゐる田原屋にも、往時の頻繁な客脚はなくなつたし、一時は銀座のカフェーを悠々と端睨してゐたカフェー・オザワなども、何となく時代に取り残されたもの、やうな感じがする。それは、強ちこの二三の店に限らず、神樂坂といふ街そのもの、感じがさうだから止むを得ない。

獨りこの街で肩で風を切つて歩いてゐるのは、早稻田や法政の學生たちである。

撞球場でも、マジジャン・クラブでも、いたる所で學生が幅を利かしてゐる。

肴町の角にある紅谷ベニヤのコーヒーと云へば、トロリとしたクリームを浮べて抒情派の詩人や女學生の巢窟のやうになつてゐるが、詩人なんてものがすつかり俗悪化した今日では、詩人のお顔拜見と出かける文學少女も少くなつたやうだ。それよりも、繪葉書屋の前でスポーツマンのブロマイドでも見る方がいゝらしい。

只、一坪の土間と、一頁の屋臺店に頑張つて凌々たる氣骨を見せてゐる神樂おでんの爺さんだけが昔も今も變らず繁昌してゐる。陪審裁判の陪審に選ばれたといつて「區役所は得手勝手だ」と怒鳴り時間が五分間早いと云つて煮えたおでんも喰はして呉れぬ變り者の爺、時代の後端を歩む彼の氣概こそ神樂坂唯一の名物であらう。それと、うまい物では川端の鳥料理と小鉢もので、白木屋横町の江戸源、この女將のキビくした傳法肌と、お酌をして呉れるお幸ちゃん的美貌。その愛くるしい點に於てダンゼン牛込一の小町娘である。嘘だと思へば敬愛する先輩齊藤昌三氏に訊いて頂きたい。

「お幸ちゃんは羨つたい。」といふと、

「妾し、妾し十九よ！」

これは一昨年の會話である。

「お幸ちゃん羨つになつたのだい！」

「あたし、あたし十九になつたのよ！」

これは今年の會話である。

もし、來年になつて、誰か、彼女の年を訊ねても

「妾し、妾しは今年十九になつたのよ！」

とかう答へるであらう。

彼女が、いつ、誰と結婚するかに就て、まるで自分のことのやうに氣にしてゐる人間が、上は五十歳の爺さんから、下は二十代のニキビ青年に至るまで、無慮百人を算すといふから、一應は見てをいてもいゝ代物であらう。

歡樂郷としての神樂坂は花街の外に、牛込館、神樂坂H活館といふ二つの映畫館があるだけで、數年前までは山手第一の高級映畫館だつた牛込館も、現在では三流どころに叩き落されて了つた。尙ほ寄席の神樂坂演藝場だけが落語の一流どころを集めて人氣を呼ぶが、これとて昔日のそれと比較すればお話しにならない。

只、夏の夕べに最も喜ばれるのは外堀の一席を占領した貸ボートである。

朝の一漕は健康の基——なんて、考へやうによつては甚だ變に解釋できるスローガンを掲げて旺ん

に若い男女を惹きつけてゐる。

暗い隅つこの方へボートを寄せて、なにか甘い囁きに耽つてゐる戀の男女に、わざと水を放ねかけて通る岡焼連の悪戯も、夏の夕暮の風景としてはまことにふさわしい。

ボートに乗る女學生——彼女たちの尻を追ふ中學生の多いのも、神樂坂景物の見逃し得ない一つであらう。

第四章 結婚媒介

媒介所の長

結 婚 處

媒介所と密通賣

未亡人の御相談相手

媒介所の潜行的活動

「どうして俺といふ人間はこんな女と縁が薄いのか知ら。」

世の中の怠け者を一人で背負つてゐるやうな玖島久吉はいつもさう思ふのである。

彼は仕事が嫌ひなくせに、酒と女と勝負ごとだけは耐らなく好きである。

「俺よりもつとおかしな面をした奴は世の中にはゴロ／＼してゐる。だが、それでゐてちやんと女房子供を養つてゐるのに、俺にだけ女が惚れぬといふ筈はない。」

然し、彼がいくら自分ひとりできうきめても、彼はまだ女に惚れられた嬉しさといふものを嘗つて一度も経験したことがない。

金で買つた女といふ奴は、お世辭にでもしほらしい嘘をいふものと聽いてはゐるが、彼にはさうした経験すらないばかりか、拂つた代價だけの責任を果すと、女はツンと澄しこんでスタ／＼と彼の側から離れて了ふ呆氣なさだ。それを思ふと自分といふものが忌々しくて青樓の暖簾をくゞるのも業腹でたまらぬ。

そこで彼はよく最後の賭をかためて結婚媒介所の門を潜つた。

素顔ではテレ臭いと見えて多少の酒氣さへ帯びてゐる。

「あつしやいませ。」

質屋のやうな感じのする店先「頭のテカ／＼光つた五十過の爺さんが出て来た。

「女房を一人世話して貰ひたいと思ふのだがどうだい。女はあるかね。」

「ハイ、候補者はいろいろ御座いますが、御希望の條件は？」

「なアに、目鼻さへついた女であればどんな女だつて文句は云はないのだ。」

「テへへへ、御冗談でせう。では、この申込用紙に御希望なり、条件なりを御認め願ひます。」

さう云はれた時、この愛すべき道化者は半ば結婚したやうな氣持になつて了つた。うれしさに指先が顫へて、さなきだに餘り上手でない字がいく／＼曲りくねる。

希望としては二十八歳までの體格頑丈な女、貧富を問はず、再婚者可——てな工合に書き並べて自分の提灯を持つためには

年齢三十六歳、大學出身、財産二萬——てな工合に書き並べたものである。

さて、さうなると問題は、たしかに結婚が出来るか、費用がどの位かかるか、もし先方の女と見合をする時には洋服を着たらいか、それとも紋服姿がいか、紋服とすれば貸衣裳屋に頼まなければならぬ——など、いろんなことが苦になつて来る。

先づ申込金一圓五十錢ふんだくられて、見合の手数料、成立の曉は結納金の二割頂戴いたしますといふ工合に、媒介所の方では何でも彼でもふんだくすることを、頭を下げ下げ叩きすぎる位しつこく説明して、見合の日どりをきめるのである。

「でまあ、俺の方ではどんな女だつてい、のだからすぐに承諾するとしてもだ。もし對手がいやだつて云へばどうなるのだい？」

と、女に對する自信がないだけに一應かう質問すると、

「ハイハイ、その時はすぐに別の候補者を御通知いたします。」

この場合、對手が少し頼馬野郎だと見ると、通信手数料とか何とか云つて、又ぞろべら棒な切手代を請求される。

候補者の女がやうとるまいと、媒介所の方ではそんなことは如何だつていふ、決して承諾しつこないおとりの女がチャンと一人や二人は抱へてあつて、時と場合によつては一晩か二晩相手の御機嫌を和らけて、しこたま家財家具をかつ拂つて逃げ出すこともあるんだから物凄いな。

さて、玖島久吉が右の申込をすませて二日目になると、新聞の廣告欄に

「求妻 富方三十六歳大學出身、風采佳良紳士財數萬大商店主、體強健なる二十七八歳までの方、要急再婚可××社」

甚だ人を喰つた話であるが、欺されることの好きな人而は、世の中には我々の豫想以上で、次から次に新陳代謝してくれるから、かうした媒介業者にはまことに結構な世の中と云はねばならぬ。

騙されたといふ人の噂だけでは気がすまなくて、實際自分がだまされてみないと納得できない人があればこそ、彼等の事業はいつまでも景氣よく持續される。

玖島久吉も勿論、この良にうまうまとかうつたことは言ふまでもない。最初の回は女が不承知でお流れとなり。

「どんなお骨折でもいたしましたして、必ず御期待にそむかないやうに……」

など、さもさも努力してゐるかの様に見せつけられ、三回目には漸く纏まつて、可なりな金を絞りとられた。而も、この承諾した女が又大變な女だったのである。關東關西を跨にかけて、或る時は陸軍少佐の未亡人だったり、あるときは富豪の令嬢の出戻りだったり、ABCがわからないくせに、女子大學卒業生であつたり、兎に角金のありさうな家へ三日か四日新妻として仕へては、ありつたの金を掻つ渡つてドロンをきめこむ専門の結婚魔であつたのだ。

而も彼女が結婚して二三日といふもの、いかに貞肅な妻であり、いかに夫をトロリとさせて了ふ美しい肌の持主であり、そして又、どんな色魔の挑戦に對しても柳に風と受け流すその底知れざる精力に至つては、たいていの男が三日目にはちやんと金庫の鍵も、銀行の預金帳も委さるを得なかつたほど、すべてが萬事要領よく立ち廻つたといふ。

惡運つきて目下では宇都宮かどこの女囚刑務所に叩きこまれてゐるといふが、彼女にひどい目に會はされた男は、只單に日本人だけに止まらず、某國の大使館員などもこれを愛妾にするつもりで欺

千圓の金をふんだくられた。

現在、東京市の内外を通じて約百近くもある結婚媒介所が（この中には正式に公認されてゐないものが紹介所を含む）その大部分は巧みに聯絡を取つて密淫賣を行はせてゐたことは、過般の大檢舉によつて社會のセンセーションを捲き起した。

開業以來四十年など、さも信用ありさうなことを吹聴してゐた連中までが、一人残らず殊數つなぎに檢舉され、甚だしいのは現職の中學校長さへゐた事は、未だ世人の記憶に新たなところである。殊に早稻田近くにある×友社の如きは、結婚媒介業は單なる看板に過ぎなくて、一種の社交機關であることを堂々と宣言し、社交が轉じて淫風吹きまくる魔窟となつてゐた。山手附近の良家の婦女子や、女學生や、その他の職業婦人までを加へて、心ゆくまゝ肉交の享樂に耽つてゐた。

嘗つてこの社では結婚の友などいふリーフレットを發行して、若い不良徒輩、戀愛關係の世話をしたり、金のある紳士には淫婦を提供して、別に借り受けてゐた秘密の家に連れこんだりしたと云はれてゐる。

然しこゝにいふのも、金のタンマリある漁色家などが、結婚媒介所に對していろいろな要求をするから、つい金が欲しさにそれを實行したといふやうなのが多い。

「どうだい、結婚はしなくともいふのだが、いゝ未亡人とお友だちになりたいのだけど。」と甚だ虫のいゝ要求を、使ひ立て、申込ませた地主もあれば、

「君のところにはいろんな女が来るだらうから、妾を一人世話して欲しい。」と依頼した重役もゐる。

つまり、結婚紹介所の門をくゞる程の人間は、よく思ひ餘つた性的悩みの揚句だから、たいていのことは承諾するといふ弱味につけこむ隙が充分ある。

當方老婆經營——など、廣告してゐるのは、この間の消息を雄辯に物語つてゐるものでなければならぬ。

これは數年前のことで、結婚媒介業とに關係ないが、或る日の新聞に

未亡人のよき御相談對手として交際願ひ度し、當方體軀強健なる大學生、乞御文通姓名在社××番。



たとへ三行の案内廣告と雖、遂一これに監視の眼をゆるがせにしないのが警視廳保安課のお歴々である。

「こんな怪しい奴はバクつて了へ。」

といふので、協議の結果、水莖の跡鮮かな女性の一文を與へて、

「明朝午前九時までに東京驛の二二等待合室で御待ちしてゐますわ。」

と附け加へたものだ。すると、對手が恐い小ぢさんとも知らず、姓名在社の青年は意氣揚々と待合室に現はれ、右顧左眄してゐるところをバサリとやられた珍談がある。

そんなわけで、當局の警戒が非常に嚴重になつてからといふもの、媒介所の方でも、素情の分らないやうな人には、うっかりと奥の手は出さないことにして了つた。

けれども、どうせ蛇の道は蛇といふ諺もある通り、ぢみちな商賣をしてゐたのでは、この不況時にボロ儲けのある筈もなく、恐々ながらも依然として横に車を押してゐるといふ。従つて仇やおろそかに一夜妻を提供するバカけた商賣はやらないで、自然とその方法が潜行的になつて来る。

潜行的といふ事は彈壓を受けるもの、最後の辻れ場所であり、潜行的な所に獵奇派の興味がついつて来るのだ。

公然と買へる女に對して、世人の興味がだん／＼うすらいで来るのは、これすべてアヴァンチュールの然らしむるところであつて、さうした篤志家に對して秘密に働きかけるやうになるのは、まことに止むを得ないことであらう。ものは試した。虎穴を探る探らないは諸君の御随意に御委かせてこの篇を終る。

第一章 序言  
 第二章 概論  
 第三章 研究の目的と方法  
 第四章 研究の経過  
 第五章 研究の結果  
 第六章 結論  
 第七章 参考文献  
 第八章 謝辞  
 第九章 索引  
 第十章 附録

第五章 二つの年中行事

一、第一回の年中行事  
 二、第二回の年中行事  
 三、年中行事の意義  
 四、年中行事の発展  
 五、年中行事の展望

兩國の川開き  
河中の群客  
雑踏の中に咲く戀  
お會式將讀  
街の混亂  
數十萬の人出  
男の腕に跨がつた女  
合理的な暴行

### 兩國の川開き

昔から江戸の名物は、喧嘩に火事に兩次馬だと云はれて来た。

年中行事もいろ／＼あるが、そのうちでも特筆大書すべきは兩國の川開きと、郊外池上本門寺のお會式の夜の人出であらう。

その外には一夜に何拾萬といふ群集が繰出すやうな催しものはない。

兩國の川開きは毎年七月の下旬に行はれる。雨天の日は繰延になるが、たいてい二十日前後と思へば間違ひのないところであらう。

別に大した儀式はつた催しものがあるわけではなく、夜の隅田川にボンボンと花火をあげて見せるのだが、この花火が素晴しく大仕掛なものと、その種類が千種萬態で、夜の大川端はさながら火の海と化して丁ふ。

全くその夜の豪快壯麗なさまは、恐らくいづくの土地に行つても類のないものだ。

兩國の橋の袖を中心にして、上流下流にはもやひ船がぎつしりと埋り、橋の上は蟻の匂ひ出る隙もない位人でうもつて了ふのだ。

川船の席に坐つて眺めやうと思へば、既に正午までに出かけてカンカンと照る七月の太陽を、もの六七時間も全身に浴びるだけの忍耐力がなければならぬ。

陸に二十萬、河に十萬、上と下の橋に數萬の群集が殺到して、この夜ばかりは全く命がけの見物である。

この川開きの花火は萬治年間に始まり、五月二十八日から八月二十八日まで、江戸時代の納涼場としての遺風が傳はつたものだと言はれてゐる。

その頃は川の兩岸に葎子圍ひの茶店が櫛の齒の如く並んで、郷俎つほい禱がけの下町娘が、道行く人にこぼれるやうな愛嬌を振りまいたさうであるが、今日ではさうした風景に見られない。

川開きのほんとうの氣分は明治中期以前のもので、明治二十何年かに餘りの人出で國橋が墜落してからといふもの、往年の自由奔放な享樂氣分は著しく削がれたといふことである。其角の匂に

この人數舟なればこそ涼みかな

とある如く、これが他の催しものであつたら逆も涼み氣分などの騒ぎではあるまい。

昔からこの花火の打揚は、鍵屋彌兵衛と玉屋一郎兵衛の二人でやつてゐたが、玉屋が没落してからは鍵屋一軒の獨占になつて了つた。

以前は、川開きの夜と云へば多くの粹人たちがやかた舟に乗つて、柳橋の藝妓を對手に心ゆくまゝ一夜の歡を盡したといふ。

まことのやかた舟に乗るには、後ずさりにお尻から入るので、頭から入ると女の結ひたての髪も目茶々に墮れる憂ひがあつた。

客の方でも亦それが面白さに舟遊びをするので

「どうしたい、はいれないのかい？よし、さうなら俺が引つばつて入れてやらう！」

と、妓の帯ぎわ掴んで對手をヒヤ／＼させて喜んだものだ。又、なかには猥褻な影繪を映してみせる舟などもあつて、夜の大川端の享樂は今日とはまるで比較にもならなかつた。

かうした古老の話しを聴くと、僕たちは熱々昔の情緒が暮はしいものに考へられる。今日ではそれらの屋敷舟も、すっかりモーター・ボートに變つてしまつて、只徒らに取締りを嚴重にしてゐる警官の眼だけが物凄くキウ／＼と輝いてゐる。

然し、橋の袖に軒を連ねた生稻や福井樓など一流の料亭では、美しい柳橋の妓さんたちを相手にドンチャン騒ぎをやつてゐる株屋のたりのお客さんで一ぱいである。

夜の大川端と柳橋藝妓、そこにはまだ幾分か江戸情緒の残影があるやうな気がするが、この川開きの日など十日も前から約束してをかないと、ゆつくり坐つて花火を見ることは思ひも寄らない。只、漫然と出かけたのでは、人混の中に捻ぢこまれて足が千切れるほど蹂躪られたり、まかり間違へば氣の早い河岸の兄い連の喧嘩の飛はつ散りを受けて、頬べたの一つや二つぶん擲られることもある。

なればこそ、頭の働きのいゝ者は、人波に巻き込まれたと思ふと、いち早く若い娘さんの側になじり寄つて、人が押しかけてくるのを待つてゐるし、女の方でもこれはと思ふ男の側にも身を寄せて、その頑丈な胸のあたりに結びたての髪を保護して貰ふ恰利さを發揮する。

少し頭の働きのいゝ人間と悪い人間との差は、かうした場所でハッキリ區別がつくものだ。

どうか諸君だけは、頬べたをぶん擲られる組に入らないやうにして頂きたい。

此頃でこそ、銀杏返しにうら恥しさうな薄化粧をした下町の問屋の娘らしいものを見ないが、五六年前までは、二人づれ乃至は三人づれの若い娘さんたちが、しほらしけに顔を伏せてちつと押しつけられる苦痛を我慢してゐるさまが目についた。

又、運よく船席に陣取つて娘の側に坐つた時などは、もし彼女が幼い弟でも連れてゐたら、自分は暑い位辛棒して肩に乗せてやるといふ。

すると娘はかういふであらう。

「まあ恐れ入りますわ。正ちゃんいゝわねえ、よそのお兄さまに擔いで頂いて。ほら又あがつた。

よく見えるでせう？」

そして、それだけでなしに、彼女も亦弟に觸れるやうな恰好をして、この親切な男の肩に手をかけるであらう？

そこまでうまく事がはこんで、それでいざ歸るといふときに

「どうもいろいろすみませんでした。」

「いえ。どういたしまして……」

と、たゞそれ切りで別れて了ふやうな男には、おゝ、どうか神さま、彼には一生戀人など與へないで下さい。

### お會式綺談

十月にはいつて、夕べに吹く秋風に早や冬の近づいて來たことが感じられる頃。

テックテン／＼ツクツク、テックテン／＼ツクツク——南無妙法蓮華經——

と、東京市内外のいたる所で、日蓮信者の團扇太鼓を叩いて廻る音がきこえはじめる。

十月十二日の夜、この日こそ三四十萬の群集が、池上へ、池上へ——となだれを打つて殺倒するのだ。下町も、山の手も、郊外も、萬燈押立したいなせな若衆を先頭に、一貫三百どうでもいゝと、さ

ながら天下分目の戦にのぞむ古戦場のやうだ。

そこでもこゝでも先陣争ひの小競合がはじまり、一心太助が啖阿を切るやうな論争がはじまる。

「ペラ棒め、なにいつてやあがるんだい。押すな突くなの文句をいふ位なら、始めから餘計な出姿張りなんかしないで、家にくすぶつて年寄の按摩でもしやあがれ。」

「なにをツ、てめえの方で無茶苦茶に押して來やあがつて啖阿を切つてるやあがらア。へん、そんな啖阿なら石の地藏さんにでも浴びせやあがれ、この唐變木め！」

それから又テックテン／＼である。

街といふ街には背から朝まで群集が大きな雪崩れとなつて歩き廻り、市電と云はず省電と云はず、郊外に通ずる幾條かの私營電鐵さへ終夜運轉を行ふといふ盛況さだ。

この夜ばかりは大日蓮の偉大さがしのばれて、夢我夢中で歩く人々をも單なる彌次馬と見ることが出来なくなる。

殊に品川から大森、池上へかけての道路は、それこそ如何なる大デモンストレーションをもつてし

ても、到底これだけの人数は動員出来まい。膳をつぶして料理屋の二階へ脱走する人や、へとへとになつて品川の宿場女郎を求めに行く若衆などが波のやうに押しかける。

もしこの附近で列の真中にでも入つて見給へ、それこそ如何なる力をもつてしても、絶対に抜け出ることは困難である。

人の肩に掴まれば掴まつたまゝ、押へられ、ば押へられたまゝ、否が應じも前へ前へとすゝまなければならぬのだ。

そこでは個人の力といふものは全く失はれて、ただ一つに塊つた大群衆の力が、恰も巨石の坂を下るやうな勢を感じしめる。

狭い道の両側に立ち並ぶ商家は、只、自分の店先をぶち壊されぬことを祈り、数千の動員を行つて警戒の任にあたつてゐる警官も、只茫然と立竦んでゐるより他に仕方がない。馴れたスリ等は此時とばかり、その天稟の才を發揮するが、拘られる方では手足ばかりが氣になつて眼が眩みさうだ。

かくの如き状態であるから、次の如き珍事が出懸しても誰を責めるわけにも行くまい。

事件といふのは斯うだ。

この夜の状況を記事にすべく、或る雑誌社の婦人記者は、綺洒な洋装でこの群衆と共に池上本門寺の階段まで漸く辿りついた。

いゝ機会を狙つて列外に出やうとしてゐた苦心も女の力では水泡に歸し、ワツシヨワツシヨでせり上げられてゐるうち、スカートはまくし上げられ、遅ましい男性の腕つぶしが自分の脚にからみついて、彼女は丁度木の枝にでも股がつたやうな工合になつた。

さあ困つて了つた。

振のけやうとしても、またいで降りやうとしても、體の自由がきかばこそ、身はまるで鐵板にでも壓せられた如く貧乏ゆるぎも出来ないのである。

もし洋服のスカートでも引裂かれたらどうしやうと思つて、彼女は半ば泣出したい氣持になつた。對手が故意にさうした悪戯をしたのか、それとも押し倒されさうになつて、ふと起き上る瞬間自然とかうなつたのか、その原因たるや甚だ不鮮明である。

見れば背後の男も、どうかして體をすり抜けやうと藻掻いてゐるらしいが、もがけばもがく程よい工合の悪い状態になる。

もし、この際對手を怒鳴りつければ、どんなしつぺい返しを喰ふかも分らないといふ懸念は、彼女の心をして益々弱いものにしてしまつた。

かくして、漸く階段の絶頂まで上つた時、彼女はこの惱ましい桎梏から脱することを得たが、靴下止は外れ、ストッキングはぶら下り、スカートはクシヤ／＼にめくれてしまつて、その様實に慘廢たるものがあつたといふことである。

其後、彼女は常夜の追憶を人に語つて曰く

「あんな苦しいこと未だかつて一度もありませんでしたわ。只、體がせつないだけなら、それあまだ我慢が出来ますけれど、なにしろ……」と顔を眞緒にして

「最も合理的な暴行を加へられても、きつとどうにもならないことよ！」  
紳士、淑女諸君の警戒を促す次第。おわかりですか？

## 第六章 ダンサーの流すエロ



肉の香り――

ダンスの遠出――

ダンスから伯爵夫人に――

ダンスの收入

プレゼントとサービス

舞踏場荒しの不真面目

不良ダンスと罰金

稍々下火になつたけれど、それでもダンスの流行は依然として旺んである。

十年前までは、僕たちは只人の噂や話しに聴くだけで、それがどんなに愉快なもので、又どんな感じのするものか想像もつかかつたのだ。

帝國ホテルなどでは外人や、日本の上流階級の人々が集まつて早くからダンスに熱中してゐるが、これが一般的に普及しはじめたのは僅々四五年前のことにすぎぬ。

僕は早くからこのダンスなるものに並々ならぬ興味と憧憬を感じてゐた。

若いハチ切れさうな柔かい女の體を抱いて、頬と頬とをすり寄せて、そして足を觸れたり放したりして踊り廻るもの、喜びはどんなであらうと――

そのうちに、東京のそちこちにダンス・ホールなるものが出現した時の喜びは、實に手の舞ひ足の踏む所を知らない位であつた。

稽古を始めた頃の苦心は今思ひ出しても頬が赤くなるのを禁じ得ない。

「そんなにビクビクしないで、もつと體を密着けて踊るものよ。あなたが恐けるから妾しの足を踏

むんぢやないの！」

かう云つて踊り子から叱り飛ばされても、僕は體をくつつけることが出来なかつたのである。

如何して？なんて、そんなことは訊ねる方が野暮。ある。

かうしたものの惱ましい修業はあながち僕一人の経験ではあるまい。殊に初夏の夕暮に女の薄い衣服を通して傳はつてくる體温は、彼女の漂はす香り高い香水の匂ひと共に、苛立、しいまに男の神経を掻き亂す。

いかにスピード時代でも、ダンス・ホール以外ではいきなり初見の人に抱きついて踊るなんて藝當はちよつと出来ない。

たとへ妻や戀人のある人間でも、よその若い女を抱いて踊る氣持は又別である。

社交舞踊といふと甚だ體裁がいゝが、僕たちの日常生活では、ちよつとお客さんが來たからと云つて

「いやあ、よくいらつしやいました。さあ踊りませう！」

といふやうなことは殆んどない。だから、つゝまる所は女と男とが抱き合つて踊るといふ點に百パーセントの興味があるのだ。不服があるならどんな横槍でも入れるがよろしい。もし踊り子なるものが男であつたなら、御婦人方はいざ知らず、僕たちは、恐らくダンスなんでものは見向きもしないに違ひない。

現在東京市内外には凡そ二十前後のダンスホールがあるが、營業方針は大阪のをそのまま繼承してゐると云つて差支へない。切符制度でない舞踊場は小川急沿線の下北澤にある笹田舞踊所と澁谷の常盤會位のものだといふことである。

踊る時間はたいてい午後二時から六時までが晝の部、六時以後は夜の十一時迄といふことになつてゐる。

晝は蓄音器の伴奏で踊るのだからチケットが一枚十錢、夜はバンドを使ふからその倍額しほられる。理由はほかにもあらう。

僕が最もよく出入したのは、日本橋ビルディングの六階にあつたソシアル・ダンスホールで、後にダ

ンサーの風紀紊亂問題から廢業してしまつた。

若い會社員や學生が多く、中老紳士は他所と同じやうに極めて稀であつた。ダンサーは十人そこそこであつたが、愛想がいゝのと、モーシヨンさへかければ文句なしに連出しが出来るといふので、一時はかなり繁昌したものだ。大森の砂風呂かどこかで、若い青年と散々にふざけ散らしたといふ廉で數名の踊り子が珠數繋ぎに檢束されたといふが、残念ながら僕はボンヤリしてゐた爲に、あたりそれを見る機会を失つた。顧みて返す返すも口惜しい次第である。

今考へて見るとさうした問題を起したのは、某デパートの苦み走つたモボの店員だつたに違ひあるまい。僕は彼がS子といふ踊りのうまい小柄な女と踊るたびごとに、猥褻な話をやらかしたのをしばらく耳に差はさんだ。

「ねえ、きつと行くネ。いゝかい明日の晩だよ。」

「もうわかつてるわよう。」

「然し一緒に出ては都合が悪いな。」

「だからさ、あなたが一つ先の停留所の方でブラブラうろついてればいゝでせう。」

聽いてゐて心中甚だ面白からぬものがあつたが、別に僕が惚れてゐる女でもなかつたので撫然として聽き流してゐた。

なにしろ、踊る時間しか談話を交へることが出来ないのだから、四つに取組んだが最後ロクな話しをしないのは蓋し止むを得ない。

それからといふもの、彼等の踊り工合を見るともなしについ目撃すると、女はいつもニコ／＼微笑を含むで、時には殆んど無意識らしい風情で、自分の頬を男の頬へすり寄せるのだ。後ろへ廻した手だつて、體のくつつけ工合だつて並々ならぬものがあり、華酒な細い指先は折々男の脇腹を擦ぐつてゐるやうにさへ見える。見てゐると、派手な女の薄衣から溢ふれる筋肉の接觸が、まるで彼等二人を酔はしてゐるかのやうだ。

「まあ凄いわねえー」

と僕の對手のダンサーが聲を落して囁きかける。

「あすの晩、どこかへ一緒に行くのだとさ。」

「あらさう、羨ましいわね。」

「羨ましければ君も行けばいぢやないか。」

「でも妾なんか誰も連れてつて呉れないわ。」

「そんなバカなことはないよ！」

その次を話したい時には、きつと音楽が止まつて東西に別れるやうになるのだから癪である。再び音楽が始まるともう他人にとられてゐた。と云つて、切符を四枚も五枚も與へてまで彼女を招く元氣は僕にはない。第一、それほどその女の顔はよくなかつたのだ。

赤坂のフロリダとか、人形町のユニオンなどのダンサーは、賣れつ兒になると月に四五百圓も稼ぐといふ。

かうなると、へたに男の兒など作つて大學へやるよりも、どしどし女の子を拵へて踊り子にでもした方がよさそうだ。

殊にフロリダに居た芳ちやんなど、目下では押しも押されぬ伯爵令夫人だ。東中野舞臺のカフエー・ユーカリの娘さんで、ひところプロ派の作家が東になつて押かけては、磯のあわび、畦み合ひをやつたものだが、多情多感のフラツパーも顧みて轉た今昔の感に耐えぬものがあらう。

もともと、ダンサーなどあまり致養のある者は少なくて、女給あがり、スターのなり損ねなどが多いので、なかには逆も意地ぎたないのさへある。こちらから云はなくとも、ちやんと先様の方から

「今日一緒に御食事して下さいませんか？」

と圖々しく出てくる奴もあれば、新調の洋服をプレゼントして呉れば、いつでもお好みのまゝに最後の奉仕を否まないといふ徹底したものもある。

「三百圓、四百圓なんて収入があるといふのは嘘つばちだわ。そんなにたくさんお金のとれる人なんかゐないわよう！」

と、某ダンス・ホールの光一が騒いだことがあるが

「働き一つでどうにでもなるのだらう？」と云つたら

「それあネ」と云つて口をつぐむだ。

横濱と東京を股にかけて、あらゆるダンス・ホールに出入する女が二三人ゐる。

ホールの隅にちぢこまつて、對手はだれでもいゝから話しかけて呉れるのを待つてゐるのだ。然し  
たまり席では決してエロチックな話しはもちかけない。つまりどこで刑事が聴耳立てゝゐるかかわら  
ないからだ。

その代り、一たび多勢の中へ一緒に飛びこんで見給へ。ジャズの流れと、ステップの騒音とを巧み  
に利用して、いともコケツトな流暢と、甘つたるい言葉とを溶びせかけながら、そのまゝでは別れら  
れないやうな踊り方をしてくれるのだ。

今日渋谷の喜樂館にゐるかと思ふと、明日は銀座の國華ダンス・ホールに現はれる。その次には飯田  
橋の踊踏場といふ工合に、轉々と流れ歩いて、その色魔ぶりを發揮してゐる。彼女のためにひどい  
目に合つた某國大使館の書記官や、渋谷邊の某大家の令息など可なりゐる。

かうして、踊踏場から流れ出るエロ景物が益々露骨になるので、最近ではホール経営者の監督もなか

く嚴重になつて來た。

ふん掴まつたが最後、營業停止を喰つた上新聞で叩きつけられるのだから無理もないが、その代り  
ダンサーと客の醜關係は、より一層潜行的になりつゝある。

以前、一つ先の停留所で歸路を共にしたものが、今日では明る日の全然ちがつた場所で密會したり  
日時を定めてホールの人たちにはまるで見當のつかない方面にランデ・ブウをやる。

若い男若い女の間柄である。少々ホール経営者から罰金位とられたつて、好きな男と好きなことを  
して遊びたくもならう。

東京ではこの罰金制度の餘り悪らつたのをきかないが、大阪の有名なユニオン・ダンスホールでは、  
女が男と出かけるところを見られると、莫大な罰金を取つたと傳へられ、眞偽は別として、テイケツ  
トの代よりも罰金料の方が多かつたといふものさへゐる。それでも、彼女たちのパトロンは幾らでも  
罰金を收めてゐるといふから、彼女たちの尻ふりダンスが如何に凄まじいものであつたかは想像する  
に難くない。

銀座の某カフェーでも、女給の缺勤に對してはそれ相當の處罰があるといふが、これも資本家は大阪である。弱い無給の女から罰金をとるなどチト残酷であらう。

さて、話しが飛んでもない方向に脱線したが、舞踏場でも近頃は變にからみついたやうな踊りはさせないやうにしてゐる。フォックストロット・ワンステップ・ワルツなどが主で、煽情的なブルーズやタンゴ、或ひはブラック、ボトムなどは本牧のチャブ屋あたりのものである。

胡蝶の如く入り亂れて踊るさまは、單に見るだけでも相當に春心を唆られるが、その優雅と壯麗さを見やうと思へば、クリスマス之夜に帝國ホテルに行くがよからう。

招待された外國の使臣や上流階級の令夫人や淑女たち、中には年齢未だ十六七歳の少女が外人とビツタリ四つに組んでゐるのさへ見受けられる。

勿論、淑女たちのよきお兄様や、お友だちも混つてゐる。

ダンスが済んでかち彼女たちが何處へ行くかつて？そんなことは知りませんよ。

## 第七章 ランデ・ブウ

公園のロマンス

公園の芝生に夜を明かす人

尖端的な、餘りに尖端的な

墓地の夏の夜景

上野の森の接吻

芝公園の失敗

郊外のホテル

公園は人の散歩するところ、埃りつほい空氣ばかり吸つてゐる都會人が暫しの戀ひを食るところ、それ故にこそ可愛い草花が植ゑられ、樹木が植ゑられ池や噴水やベンチや四阿が設けられるのだ。

「そんなことなら誰だつて知つてらア。」

では、その他に公園はどんな役割を果してくれるか。云はずと知れた密會場所の安全地帯としてある。

女とは會ひたいが、さて劇場やレストランで會ふには金がない。いや、金はあつても、誰がどんな所で見てるかも知れぬ。知人に見られてはちと都合の悪い戀、さればと云つていきなり女を待合かホテルに導くほど戀が成熟してゐない場合、そんな時は誰でも公園といふものが如何にありがたい場所であるか、つくづく身に沁みて嬉しいものだ。

公園の嬉曳はその動機に於ても極めてロマンチックである。胸に秘めた戀をやつとの思ひで打明けたり、そつと手を握り合つて微笑する程度の戀には最もふさはしい。

大つびらに女を征服するホテルや待合などのやうな大膽放埒な喜びはないが、やがてその喜びに達

する前哨線とも云へやう。

現在東京には上野、日比谷、芝の三大公園をはじめ、各區に一つ位づゝの小公園がある。公園の雅趣は何と云つても春から夏にかけてのもの、殊に夏の夕暮が最も四季を通じてエロチックな色彩が濃い。

縁日流しの演歌師が唄ふやうに

夜の公園散歩すれば

みんな二人づれ

私し一人で淋しいわ

.....

事實、上野の森、日比谷、芝の山内いたるところに手を携へた男女、ベンチに並んだ戀人同志、甘い囁き、軽い憚るやうな××などが目につくのだ。

そして彼等は何れも明るみを嫌ふ蝙蝠のやうに暗い場所、暗い場所を選んで人目をさける。

なにもかも尖端的になつた今日では、これらの公園も單なるロマンチックな密會場所ではなくて、戀愛の教場に進化して來た。

日比谷公園など夜の十二時になると、一應園丁が見廻りをして各所の入口の門を締めて了ふ。そして、これは朝の一時にならなければ明けないのだ。

つまり、いろ／＼風紀を亂す輩があるるのでその筋よりのお達しである。

然し、戀は曲者とかいふ通り、入口に交番があつて、十二時すぎると戸締りをして、どこからどうしてもはいれないやうになつてゐるのに、その翌朝になつてみると、たしかに戀の男女が忍びこんだ形跡がある。

それは昨夜掃除したあとに落ちてゐるのでわかる。

當局では公園の神聖を汚すこと甚だしきものとして、燈をたいて眼を光らしてゐるのであるが、實に説教強盗の如く變現出沒自在を極めるのだから驚歎に價するものがあるではないか。

つまりこの用意周到なるエロトマニアは、自由に通行し得る時間に入つて來て、息を殺すやうな深い



木蔭に身をひそめ、翌朝門が開くのを待つて何喰はぬ顔で別れるのだ。なかにはかうした彼等の舉動を探つて飯の種にす、奴がゐて、二三年前某山手の待合、女將が仇し男と密會し、それから二三日経つて一人の怪漢に前夜の醜状をつきつけられ、四日四晩無錢遊興された上に、若干の小使までせしめられたといふ珍聞さへある。

上には上、下には下、流石に東京は広い。

もとの日比谷公園は明治初年は一練兵場にすぎなかつた。それ市が拂下を受けて堂々五萬坪の公園にしたものであるが、練兵場が密會場所になるのも何かの因縁であらう。

上野の森はこれ又、學生と女學生、商家の娘と番頭、サラリーマンと女給と云つた風な取組の嬉曳が年中行はれてゐる。

一々これを取締つて調べてゐた日には、逡巡も終ひには神經衰弱になるかも知れないといふので、度を越えた者以外は三度に一度に見逃してやるといふ寛大さである。

殊に上野の森は、廣くて樹木鬱蒼たる場所が多いから、勢ひ若い男女が寄りつくのであらう。困つ

た奴等だ。

宵のうちは眼下に不忍池や、遙か向ふの根津の高臺の燈火を眺め乍ら私語してゐた男女も、更けるに連れてだん／＼奥の方へはいつて行く。

さうかと思ふと、よきムク鳥でもゐないかと、上京した田舎娘をかどわかす岡つ引 眼がギョロギョロと暗の中に光つてゐる。

上野の森はこれを歴史的に見ても、いろいろなロマンスが残されてゐる。討死した勤王派の志士の骸にすがりついて泣いた町家の娘の魂や、男装して幕軍と戦つた勇ましい少女の血潮などが公園の土底深く埋もつてゐる。

日比谷があくまで人工的な公園であるに反して、上野 森は自然そのままの野趣が多い。まして附近の展望など、下町一帯から遠く品川大森近邊迄のびのびと開けてその絶佳 眺めは比すべくもない。若い男女の感傷的な嬉曳の多いのは一つはそのせいであらう。

圖書館歸りのカ學少女とその尻を追ふ不良徒輩の一團が互ひに應酬し合つてゐるのも苦笑を催させ

るし、夜更けると客を送る池の端の藝妓の艶めかしい姿も木の間を縫ふ。

然し、公園よりも遙かに露骨なランデブウが青山の墓地で行われている。

こゝは真中を貫く広い道路が只一本あるだけで、たまに麻布の霞町方面から青山の本通りに抜ける自動車以外には、めつたに人通りといふものがない。

夜の八時九時になると深山にでも入つたやうな静けさだ。

星敷町の不良少年少女が、危険な戯れとも知らずあたら貴重な花を散らして了ふだけでなく、夏の夜更などにはピタリと立派な自動車さへ止ることがある。

殊に墓地の通路は四方八方どちらにでも直ちに逃れ得る便があるのと、人通りのない點が或る種の安心を與へるのであらう。

六本木署あたりの刑事が、二人連れでグルグル走り廻つてゐるのを數年前みたことがあるが、犯人は遂に發見出來ず、

「顔あたりめが……」

さう云つて思々しさに引きあげた役人の姿が、今も尙ありありと眼前にちらつくやうである。いくら秘密の遊戯にしろ墓地まで選ばなくてもよさそうなものを――。

芝公園では僕自身がひどい目會はされた経験がある。

芝園橋畔にある芝園館に、僕はいとしい彼女を連れて映畫を見に行つた。

映畫館としては二流所であるが、この館だけは僕に特別の親しみがある。料金が安いからでもなく名辯士松井幸聲に惚れてゐるわけでもなく、さうかと云つて、若い綺麗な淑女の見物人が多いからといふわけでもない。

劇内の静けさと、落ち着いた気分とがトキトキ映畫を観るのには最も適してゐるからだ。題は忘れたが映畫は清純な美しい戀物語だつた。エロ味もグロ味もないものではあつたけれど、僕たち二人に餘からず感動を與へた。

映畫が済んで外へ出ると、そのまゝ乗物に乗るのは惜しいやうな美しい月夜の晩である。

「少し歩かない？」と彼女がいつた。

「少し歩かう。」と僕が答へた。

それから高い五重の塔が月明りにくつきりと空に浮んでゐる芝公園へ二人は歩き始めたのである。忌々しさうにチラリと横目で睨んで通る人々を尻目にかけて、僕たちは木立の多い暗い方へ進んで行つた。

今みて来たばかりの映画を自慢らしく批評してゐる女や、女のいふ事には一々相槌を打たねば気が済まないやうに彼女に和す男、その他夫婦らしいのや、娘だけや、いろ／＼な人影が通り過つて行つた。水の落ちない瀧の側を通つて、薄暗がりのベンチに僕と彼女は腰を下すと、

「何だか妾し氣持が悪いわ。」と女が云つた。

こんな暗がりを選んだのは、僕に野心があるためではない。野心があればこんな場所を選ばなくたつて、彼女はいつでも僕のホテルに自由に出入りできる間柄なのだ。

自分たちの野心といふよりも、人の戀心を眺めたい悪戯心で暗い所に來たのだ。然るに、計畫は美ごと裏をかゝれて、僕たちの前に佩劍の音と靴音がして來た。

「あゝこちらから、君たちはそこでなにをしとるか。アーン。」

「なにもしてゐません。」

「では今までなにをしてゐた。」

「あらいま来たばかりですわ。」と女が答へた。

「なににしてこんな暗い所へ來たか。」

「暗いところへ來てはいけないの？」

たうとう彼女は持ち前の負け嫌ひをぶちまけてしまつた。

「いかんといふわけではないが、選んで暗い所にゐなくてもよからう！」

と稍々聲が高くなつた。

「選んだわけぢやなくつてよ。こゝが暗いのがいけないのですわ。」

「君たちはいつたいたいなぢやね。」

「妾しが女で、こちらの人が男ですわ。」

「誰がそんなことを聞いたか、ちよつとそこまで來給へ。」

つまり、自分たちで人のエロ振りをやうとしたのが、却つて反對の結果になつて、あゝ云へばかう、かう云へばあゝと、ものゝ一時間も油を絞られて、放々の體で逃げ歸つたことがある。

然し、最近では若い戀人同志は多く郊外を利用する。それは知人の目に觸れないのと、楽しいビクニツクの気分と。もう一つは彼等の戀を更に完璧なものたらしめる設備完全な多くのホテルがあるからだ。

目黒蒲田電車の中途には、四方森にかこまれた洗足の靜かな湖水があり、湖上にはボート、湖畔には洗足ホテルがある。

御散策には是非洗足へ、ダブルベット、朝湯アリ——など、粹な小廣告が屢々新聞に出てゐるのを諸君は發見するでせう。

井の頭の森、村山の貯水池、さては武蔵野の平原を銀河の如く貫く多摩の清流、それらはすべていろいろな戀物語りとともに、いやが上にも若い人々の熱い心を咬り立てる。

## 第八章 花街秘話